

小学校通常学級における教育活動の営み

—「自閉症」といわれる一人の児童の6年間の学校生活をめぐって—

滝坂 信一・武内 秀樹・川崎市立西梶ヶ谷小学校

(国立特殊教育総合研究所) (保護者)

はじめに

現在、小中学校の通常学級では様々な子どもたちが学び、ともに学校生活を送っています。そのなかには心理的な困難を抱えた子どももいれば、外国で育ちことばに不自由な子どももいます。また、健康状態に不安を抱える子どももいます。そして、障害があるといわれている子どももいます。

今後、様々な教育的ニーズをもつ子ども達に合わせた学校システムづくりが世界的な規模で進展していくでしょう。我が国でも、それぞれの地域でこれを実現していくことが今、求められています。その

ためには、学校や社会のシステムが代わっていく必要があります。しかし、このシステムを変えるのが私たち自身であるとすれば、私たち自身がいかにして私たち自身の発想や意識を変えていけるかが決定的な要因であるということが出来ます。

本稿では、一人の「自閉症」といわれる児童、武内佑樹さんの6年間にわたる学校生活と、彼の成長を支えてきた保護者、学校の取り組みを取り上げます。中心は、関係者から得られた資料です。このなかには、保護者をはじめとして、関係者が彼の対してどのような思いや願いを持ち、彼を見つめてきたのか、必要な工夫をしてきたのか、そして彼がどのような小学校生活を送ったのかが述べられています。

なお、文中は児童、担任教諭、補助指導員等はすべて実名になっています。このことについては、保護者の武内さんをはじめ、それぞれ当事者方々と直接に相談し、実名とすることにしました。特に、保護者の武内さんからは、この内容が佑樹さんの小学校生活がどのようなものであったかを表わすものであり、ご親戚、中学校入学後出会っていく人たちに読んでもらえるものになればと思うと、メッセージをいただいています。

I. 事例の概要

1. 学校概要

川崎市立西梶ヶ谷小学校

表 1. 学校概要

\年度(平成)	8	9	10	11	12	13
児童数(教員数)	501	500	489(23)	517(24)	494(24)	496(25)
学級数	15	16	15	17	18	19
特殊学級						
児童数(教員数)	4(3)	3(3)	3(3)	5(3)	5(3)	6(3)
開設学級	知、情、聴	知、情、聴	知、情、聴	知、情、聴	知、情、聴	知、情、聴
級外教員(専科)	—	—	2(初任1)	1(音楽)	2(音楽)	1(音楽)
TT(教科名)	—	—	1(算数)	1(算数)	1(算数)	1(算数)
武内さんの学年	1	2	3	4	5	6
児童数(学級数)	88(3)	84(3)	78(2)	85(3)	80(3)	79(3)
学級児童数(担任)	30(高田)	28(高田)	39(北林)	29(小松)	28(北林)	27(金津)
校長	須田高志	釜田勝			安達芳郎	

(敬称略)

2. 武内佑樹さんについて

1989年8月21日生まれ

診断：平成7年5月19日

境界知能、非定型自閉症残遺状態、スタージ、ウェバー症候群(の疑い)(川崎市中部地域療育センター 栗田広医師)

(1) 就学前

<川崎市中部地域療育センター>1年8ヵ月通所

<私立幼稚園>2年保育

ポーター教室(4歳夏から小1にかけて)

本研究所教育相談(5歳2か月～現在)

(2) 就学にあたって

私立小学校(2校)、近隣の小学校(通常級、特殊学級)を検討し、現籍校に決定

(3) 就学後

① 1学年：

ア)特殊学級にて「算数」と「国語」の指導(6月～3学期；3～5時間/週)

イ)補助指導員(学校が教育委員会に申請、人選については保護者が指名し、学校が承認)7月から3人、2学期2人で1日3時間、その後1日3時間半になり現在に至る^(註)

ウ) 3 学期、担任から特殊学級転級が話題になる。
エ) ことばの教室：月 2 回（3 学期～2 年生、3 年生；学期に一回）遊び中心にことばを引き出す；野球ゲーム、的当て、短いビデオ見て説明させる。

② 2 学年
補助指導員

③ 3 学年
ア) 補助指導員

イ) 家庭教師：6 月～（国語、算数 30 分；1 回／週）

④ 4 学年

ア) 補助指導員

10～11 月に、1 年生からの介助員が出産のために止めることになり、交代。

イ) 家庭教師：（国語、算数 30 分；1 回／週）

⑤ 5 学年

ア) 補助指導員

イ) 12 月～家庭教師の形態から塾に通うという形態へ（同じ人；国語、算数）

⑥ 6 学年

ア) 補助指導員

イ) 塾：（国語、算数）

⑦ 中学校について 中学校障害児学級に進路が決定。

彼は、1 年生時からクラスメイトと担任に「武ちゃん」との愛称で呼ばれてきました。いつから、どのように、誰からこの呼び方が始まったかは定かではありません。家庭ではご両親から、また補助指導員の方からも「武ちゃん」と呼ばれていますが、彼は学校でのこの呼称をとっても気に入っていたように思います。

（注）「補助指導員」：平成 8 年度に始まった川崎市の制度。川崎市立小学校及び中学校の通常学級に在籍する障害のある児童生徒で、日常の学校における教育活動に際して援助を必要とする場合に配置される臨時的任用職員。1 日最長で 3 時間程度、ピンポイントの援助が原則となっている。西梶ヶ谷小学校には平成 13 年度、武内さんに対する他もう 1 名が配置されている。なお、学校では「補助指導員」が「介助員」という名称で呼ばれており、アンケートの記述やインタビュー記録のなかでは使用されたまま示した。

3. 滝坂が関与してきた内容

武内佑樹さんは、通っている幼稚園から滝坂あてに紹介があり、「①ことば、認知の遅れに対する療育、②社会性の訓練、③学校について」を主訴に、平成 6 年 12 月 12 日（5 歳 3 ヶ月時）、本研究所教育相談へ初回来所されました。①、②については家庭での生活、幼稚園での様子を工夫することを保護者と一緒に考えていくことにしました。③については、居住地の学校情報にあわせて選択肢として考えられる学校情報を集めるとともに、保護者として佑樹

君の学校生活に何を期待するかについて佑樹君の様子と現実の条件から見通しを立てることに関しサポートを行いました。就学までの間、月 1 回の頻度で来所による相談対応の他、幼稚園訪問を行いました。

図 1 は、就学先と就学後の見通しを検討する過程で武内さんが整理された内容です。

入学以降は、主に電話での相談となり学校での様子や日常生活のなかでの出来事が話題として取り上げられてきました。また、教育相談の一環として学校訪問をし授業参観と担任教員の方々との意見交換を行いました。この学校訪問は、今後通常学級に様々な教育的ニーズのある子どもたちが在籍して教育を受けることが見込まれたために、保護者である武内さん、校長先生はじめ先生方にご了解を得、滝坂自身の研究という側面を含めて行うことにしました。この際、滝坂は学校の求めに応じて資料や情報の提供を行うことにしました。具体的には、本研究所の行った特別研究「教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」報告書の提供、校内研修会での話題提供、他校での取り組みに関する話題提供などです。

平成 10 年度からは、本特別研究が開始されることになり、保護者の了解をいただいて小学校に研究協力機関を依頼し、必要に応じて資料の提供等を含め協力を頂くことになりました。保護者及び小学校に説明をした、佑樹君の小学校生活をみていく際の滝坂の観点として、以下の点を挙げます。

観点：「意欲的に学校生活を送ることができるように」

- ① 教科学習について
- ② 自己表出・表現の仕方について
- ③ 人間関係（他の子どもとの関係、係り・当番活動、コミュニケーション等）の充実について

小学校には、学期ごと及び必要に応じての訪問を依頼し快諾を得ていましたが、こちらの都合から頻回な訪問は実現しませんでした。

II. 資料：アンケート記述とインタビュー記録等

本稿の中核を成している、資料の内容について一覧に示します。

(I) 小学校入学への考え方（図；武内さん作成）

1996 年 12 月作成

(II) 佑樹さんの作品から

(III) 各学年を担当された先生方への質問

【 1, 2 年生担任：高田彬成先生 】

【 3, 5 年生担任：北林満良先生 】

【 4 年生担任：小松博樹先生 】

【 6 年生担任：金津有作先生 】

【 パソコンクラブの担当：飯田 智芳先生 】

(IV) 先生方全体への質問（一部担任をされた方を含む）

(V) 担任をされた先生方へのインタビュー

(VI) 指導補助員の方への質問

【 本前原 弘 子さん 】

【 花 岡 美 紀さん 】

【 馬 場 よう子さん 】

(VII) 指導補助員をされた方々へのインタビュー

(VIII) 武内さん；保護者（ご夫婦）へのインタビュー

(IX) 「算数スペシャル講習会」

先生方への質問は、調査票に記入して頂くかたちをとりました。これは、先生方の移動によって資料を得にくくなってしまふのを避けるために2001年3月に行いました。その際に回答を頂かなかった先生方からは、その後調査票を受け取りました。また、2002年1月には、担任であった先生方及びクラブ活動で担当した先生に学校でインタビューを行いました。

指導補助員をされた方5名のうち、3名から質問紙に記入して頂き（2002年2月）、これをもとに、2月7日武内さん宅でインタビューを行いました。

武内さんご夫婦へのインタビューは、2002年2月19日に武内さん宅で行いました。

Ⅲ. 考 察

ここでは、武内佑樹さんへの対応のなかで彼の学校生活の充実と成長に寄与したと考えられる点、及びこれをもとに、今後多様な教育的ニーズのある子どもたちがともに学ぶ小学校となっていくために工夫が必要と考えられる点について、資料をもとに整理した内容を示します。

1. 担任以外のスタッフ：補助指導員

先生方と補助指導員の方々の双方の記述から、学級において担任以外の「おとな」の存在がとても大きな意味もっていたことがわかります。しかも重要だったことは、介助員の方々が佑樹さん一人の「係」であったのではなく、クラス全体に目をむけ、クラス全体の子どもたちと関係を創っていったという点です。この点については、筆者も補助指導員の方々が配慮する必要のある内容として、保護者、介助員の方、先生方に対し折りに触れ話題にしたことでした。佑樹さんとどのように距離を取り、どのように「最小限で最大限の」援助を工夫するか、また他の子どもたちへも同様な関係をつくるかということでした。

補助指導員の方々の存在が他の子どもたちにとっても大きかったことは、多くの方の記述から窺い知ることができます。子どもにとって、自分を訴えられる、また、子ども

同士ではなく先生でも親でもない、ちょっとしたことを口にしてみることができるおとながいてくれるという、そういった複数のコンタクトチャンネルがあるということは、どの学校でも考えられてよいように思います。これは子どもにとって良いからそうすべきだと言った「機能」的な側面のことではなく、学校と言う場にそのような豊かで多様な人間関係があることがその場にいるすべての人々にとって自然で大切なことだという意味です。

今年度、西梶ヶ谷小学校に補助指導員は佑樹さんの他もう1名の子に配置されています。その他、今年度の西梶ヶ谷小学校には、日本語指導教員が川崎市総合教育センターから（週1～2回）派遣されているほか、学習サポートのボランティアが一つの学年に（週2～3回）入っており、さらに障害児学級にもボランティアが（週数回）入っています。いろいろな人たちが役割意識に基づいて動くという存在であるだけでなく、まず、そこにいてお互いの関係が生れお互いがかげがえのない存在になっていくような場が学校である必要があるのではないのでしょうか。

現在教務主任の職にある北林先生（3, 5年生担任）によれば、「『こういう場（時間）に人手があったらいいな』と思うと何時の間にか誰かが入っているという感じで、校長先生や教頭先生がきっと工夫しているんだと思います」とのことです。このような在り方は、9.に述べる「開かれた学校」や「開かれた教師集団」ということともかかっているといます。

2. 学校・学級規模

西梶ヶ谷小学校の規模は冒頭に示した通りです。また、本報告書の別の項で触れられている、創造的な学校を作り出す教職員集団が形成されている横浜市立丸山台小学校の規模もこれとほぼ同じです。教職員集団が学校の子ども全体をどうみていくか、学年担任集団が学年全体の子どもたちをどうみていくかを考えた時に、適切な学校規模、適切な学級規模があると思います。この問題は転ずれば、一人一人の力が発揮でき、さらに創造的な教職員集団を形成するにはどのくらいの人数であればよいかということでもあります。教員が子ども一人一人の存在を感じ、子どもへの対応をよりきまこまかく行っていくとした時、言い換えれば教員が一人一人の子どもの心の動きを含めて感じ取り応じていくことができるということを考えた時、一人の担任の対応できる人数には限度があります。子どもの側に立って考えてみても、一つの学級で自分を十分に発揮しつつ集団生活を享受できる人数には限度があります。この点については、先生方のアンケート調査票記述やインタビューのなかで明確に指摘されています。実際、3年生の時は学級児童数が39人でしたが、非常にストレスの高い雰囲気の中で学年の先生方が工夫している姿を筆者は感じました。

そして、ここでも補助指導員の方の存在、果たした役割は学級だけでなく学年全体にとって大きかったと思います。

地方分権の進展によって、平成13年度から各都道府県が一部独自に学級規模を決めることができるようになりました。ある新聞社の調査によれば、既に平成13年度から5県が小人数学級を開始しており、平成14年度から新たに11県が小人数学級を開始するとしています。こういったなかでは、どのような学校の姿が目指されるのが重要になります。一人一人のもつ教育的なニーズに応える、様々な子どもたちがともに生活しともに学ぶ場を目指すこともできますし、教科学習の到達度を競う排他的な小集団を形成することもできます。

また、教育的に考えた場合に、どのくらいの人数が「集団」として機能し、子どもたちに様々な学習機会を提供するサイズなのかについては、金津先生が指摘しているように、今後検討が必要であると思います。

3. 「障害」とその子の持っているもの

アンケート調査票記述やインタビューのなかに、①『「障害」によっては対応が難しい』、②「武ちゃんには誰もが認めるすごいところがあった」という指摘があります。

①に関しては、特に「障害が重度」である場合、「多動」である場合、そして「他者に対して攻撃的」である場合が想定され、そういう場合は大きな困難が伴うあるいは無理だという判断があるように思います。しかし、「教室を飛び出していた」佑樹さんは、なぜそうしなくなったのでしょうか、また掃除道具入れを叩いたり大声を上げることが減少していったのはなぜでしょうか。それは、彼が、子ども集団の中でどのように生活し、何を学習するかについての見通しが立ち、実現していくことができる実感喜びとしてみんなで、自己表現の方法を選ぶ、自己表現することを学習していったからとは考えられないでしょうか。

②については、確かに彼は周りの子どもたちが「一目置く」力をもっている私も思います。その一部は、資料に示す通りです。しかし、そのようなものがなければ子どもたちは一緒にいることが難しいものなのではないでしょうか。

この二つは、従来の考え方と在り方を振り返り、今後学校は子どもたちに何を提供する場としてあったらいいのか、おとなの私たちはどういう存在としてそこにあったらいいかについての見直しを考える時に実際に即してしか議論していくことができない、しかし避けて通れない内容であるように思います。

4. 「特殊学級」の存在、活用

いろいろな子どもがいることを当たり前ととらえ、子どものもつ「多様なニーズ」への対応を当たり前に行える学校があったとき、子どもはどれだけ豊かな学校生活を送る

ことができるでしょうか。佑樹さんが1年生の時に障害児学級でもった個別対応の時間は、彼が彼に応じた学習ができる機会であったというだけでなく、彼が「学習の構え」を早期に獲得し、学校生活の流れを掴むことができたという点で非常に大きな意味を持ったと思います。筆者は、学校で行われる「教科学習」の枠組みと内容、そして教授法をどのように変えることによって、一人一人にあわせしかも共同の場での学習が行えるか、それを開発することが私たちが子どもたちに負っている大きな責任の一つだと思います。

また、一般に障害児学級から通常学級への参加は「交流学習」というかたちで行われていますが、一つの学校のなかで一人一人の子どもたちにとって、子ども集団にとってどのような生活、活動の共有が望ましいのかがさらに検討されていく必要があると思います。

5. 学級を越えた学年での取り組み、さらに学校全体の取り組みへ

「1クラス1担任」という現在の仕組みでは、クラス内のことを担任の先生が一人で抱え込んでしまわざるを得ない傾向があります。この結果、多様な教育的ニーズのある子どもたちへの対応をどのようにしていったら良いかということについての課題と工夫が、教職員集団のなかで共有されないという状態を産み出すことがあります。

この点で西梶ヶ谷小学校で工夫されていたのは、学級を基盤にしながらも学年の子どもたち全体を学年担任全員が責任をもとうという考え方と実際でした。教科学習でもそれは行われており、(資料IX)はその1例といえます。それぞれの先生がその持ち味を生かすということ、子どもたちの側からすれば自分を発揮する相手、人のチャンネルが複数にあるということから考えてもこの工夫は重要であり、学校全体として工夫される必要があることだと思えます。

6. 学校(教員)と保護者とのコミュニケーション及び関係：「開かれた学校」、「開かれた教師集団」

関係した方々の記述やインタビューから感じることは、学校(教員)と学校からみた「外部」の人々とのコミュニケーションの難しさという問題です。この難しさはどこから来るのでしょうか。もちろん一つには、それぞれが依って立つ立場の違いから来るものがあるでしょう。しかし、この課題が解消されることによって、学校という場はより多くの人にとって大切な場となり創造的な場になっていくように思います。

武内さんご夫婦は、「普通級」入学にあたって不安だったことは「いじめ」のことだったと述懐しています。また、中学生活に関するなかで「中学で多少のいじめにあっても

いい。実社会に出てのいじめみたいなことは、中学にはない。」とおっしゃっています。これが「いじめ」が起こってもいいということではなく、ご夫婦の覚悟のことばであることは言うまでもありません。大阪府が平成13年度から開始した府立高校における「知的障害のある生徒受入れに係る調査研究校」の一つにお子さんが通う保護者の方に筆者がインタビューしたなかでも、入学に際して心配だったことは「いじめ」の問題だったとの内容がありました。これらにあるのは、我が子に対する保護者として当然の不安と、自分の手が届かない、見えないところで我が子が時を過ごすことへの不安であると思います。そして、この不安を減らすことができるのは、実際にそういったことが起きないということだけではなく、保護者が我が子を含む子どもたちの学校での実際生活について想像ができ、子ども自身に学校生活を任せられるという見通しだと思います。そしてこの支援の必要性に気づき、工夫できるのは、先生方以外にはいません。

7. 子ども集団、子ども同士の関係＝おとなには予測がつかない

筆者にとって西梶ヶ谷小学校の体験は、瀬回ではないにせよ一つの学校に入学から卒業にいたるまでの6年間継続して訪問した3度目のものになります。この3回の経験の中、最も予測がつかず同時に学んだり気づくことの大きかったのが子ども同士の関係の豊かさとその変化でした。そこには、自分の身体の一部のように相手が必要としていることを手助けし、その行為自体について本人は特に何も感じていないように見える風景が日常的に見られました。

私たちおとなは、社会に流通している概念や規範から現象を見たり理解し、そこから人との関係をつくろうとしたりします。しかも、そのこと自体に気づかないことも少なくありません。しかし、子ども同士の関係はこれとは随分異なっています。その意味では「子ども同士の関係」をていねいに辿り、私たちおとながそこから学んでいく「人と人との関係」や「人の見方」ということがたくさんあるように思います。しかも、そのスパンは1,2年ではなく6年間の単位で辿ること、いやもっと長い射程で見つめ私たちが学んでいく必要があるのだと思います。

おわりに

第二次大戦後、国連を中心に世界的に取り組まれてきた課題の一つが人権問題です。国連憲章第1条第3項によれば、国連の目的は「経済的、社会的、文化的又は人道的性質を有する国際問題を解決することについて、並びに人種、性、言語又は宗教による差別なくすべての者のために人権及び基本的自由を尊重するように助長奨励することについ

て、国際協力を達成すること」です。そして第4項によれば、国連は「これらの共通の目的の達成に当って諸国の行動を調和するための中心となること」を目的としています。国連の障害者問題に関する取り組みもこのなかに位置づけられます。

第二次世界大戦後現在に至る、国連を中心とした「障害者問題」への取り組みは4つの時期に分けることができます。

- (1) 戦後：障害者「人権の回復」表明の時期
- (2) 1970～1980年代まで：リハビリテーション及び教育機会に関する制度的保障への取り組みの時期
- (3) 1980年代から：ノーマライゼーション（インテグレーション、メインストリーミング）思想の普及と展開の時期
- (4) 1990年代に入り：インクルージョン（人権問題への統合的取り組み）へのパラダイムシフト

1993年、国連は「万人のための社会（Society for All）」言い換えれば「すべての人を包括した社会（inclusive Society）」を2010年までに実現することをウィーン会議において決議し、以降、各国はこれを具体化する作業に入りました。その基本理念は、「あらゆる市民のニーズが計画立案と政策の基礎となる」（1994, 1995年国連決議）という考え方です。この考え方は、国家や社会のとらえ方に関するコペルニクスの転回と言えます。すなわち、社会システムに人々が合わせるという、いわば「天動説」から一人一人のニーズに基づいて社会システムを創るという「地動説」へのパラダイム転換を意味しています。本報告書が刊行される2002年は、1997年から行ってきた計画「中期」の最終年であり、2007年まで続く次へのステップの第1年目にあたります。インクルージョンは、私たち人類の歴史始めて以来の、世界規模のそして各地域社会を基盤として行われる大きな挑戦です。

近代以降、経済成長を最優先に競争社会を築いてきた現代社会がその結果産み出した社会的な病理を振り返り、新たな社会のかたちとして提案されているのが Inclusive Society であり、Society for All です。

そしてこの取り組みのなかで、根源的かつ最も大きな挑戦であるのが、「社会に流通しているコミュニケーションの様式や社会的行動規範を獲得することが難しい人々」、「それらを獲得していても現実場面で使うことが難しい人々」のインクルージョンです。

これらの人々は、これまで障害者、特に「知的障害者」「強度行動障害者」そして「精神障害者」と呼ばれてきました。これらの人々をどのようにインクルードするかということ抜きに inclusive Society、Society for All は完成しません。そしてそのような社会をつくりあげるために、学校教育の担う役割は、決定的なものです。

学校教育におけるインクルージョンの姿、「万人のため

の教育 (Education for All)」の姿が次の社会の姿を啓示するといっても良いでしょう。なぜなら、次の世代を担う子どもたちはそこで自分達がどのような社会を創るかを学ぶのですから。

そして、この領域にモデルはありません。今それぞれの学校の取り組みそのものが次へのモデルになっていくのだと思います。本稿で取り上げた、武内佑樹さんの成長と子どもたちの豊かな成長を支えた西梶ヶ谷小学校の営みはその一つであり、多くの示唆を含む内容だと考えます。

【参考文献】

朝日新聞：小人数学級 16 県実施へ、2002 年 3 月 10 日
 滝坂信一：小学校教育における「子への対応」の課題—学

級における個別支援の試みを通じて—、特別研究「教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」報告書、国立特殊教育総合研究所、1995

滝坂信一：ドイツにおける統合教育の試みと創造的な学校体制の構築—ノルトライン＝ヴェストファーレン州ケルン市における総合制学校の例から—、「障害児教育分野における協力・連携関係（パートナーシップ）の形成に関する調査研究」報告書、国立特殊教育総合研究所、2000

滝坂信一：ドイツ NRW 州ケルン地域における総合教育の実態—関係者へのインタビュー結果から—、世界の特殊教育 (XV)、国立特殊教育総合研究所、2001

中野善達編：国際連合と障害者問題、エンパワメント研究所、1997

【資料】

(1) 小学校入学への考え方

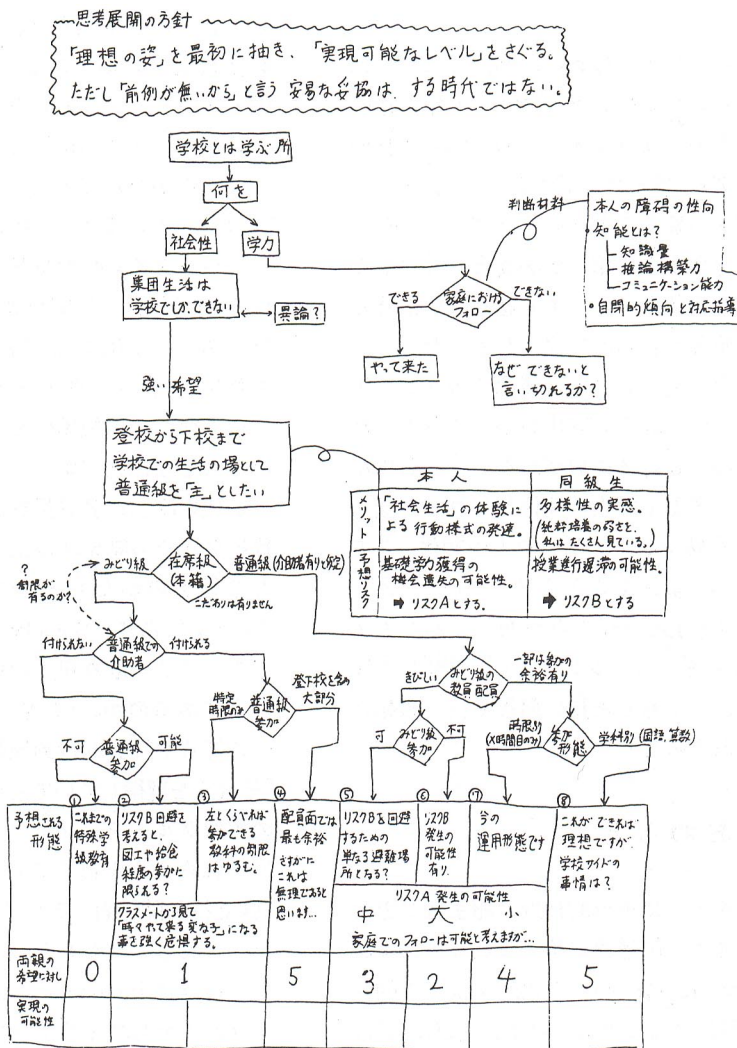


図 1. 小学校生活の見通し (1996 年 12 月武内さん作成)

(II) 佑樹さんの作品から

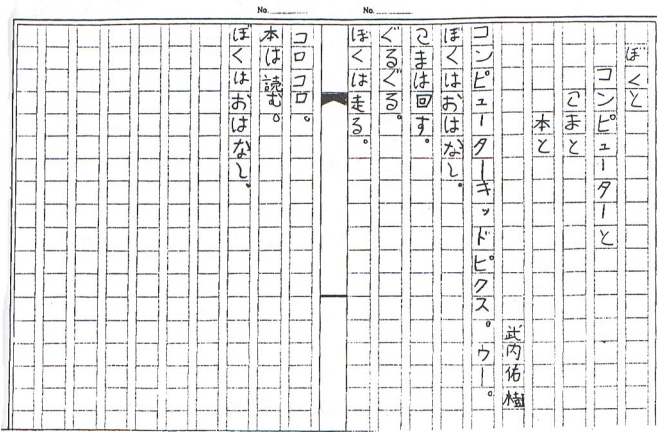


図2. 「3年生の作文」から

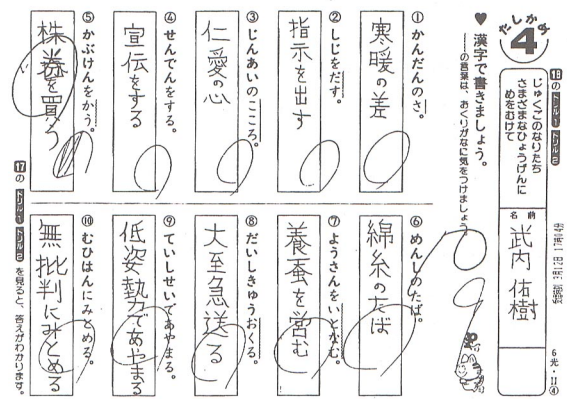


図3. 「6年生の漢字ドリル」から

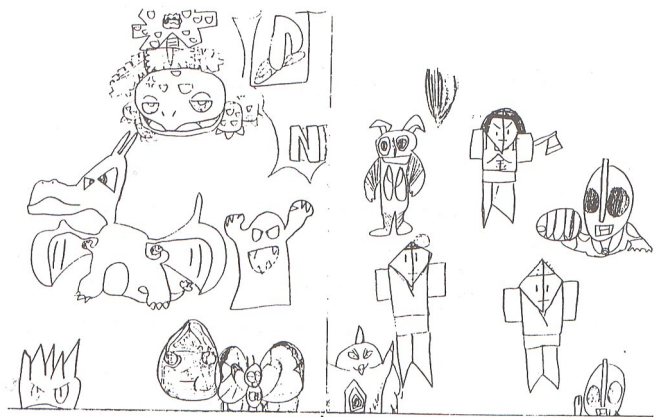


図4. 「3年生の時ノートに描いた絵」

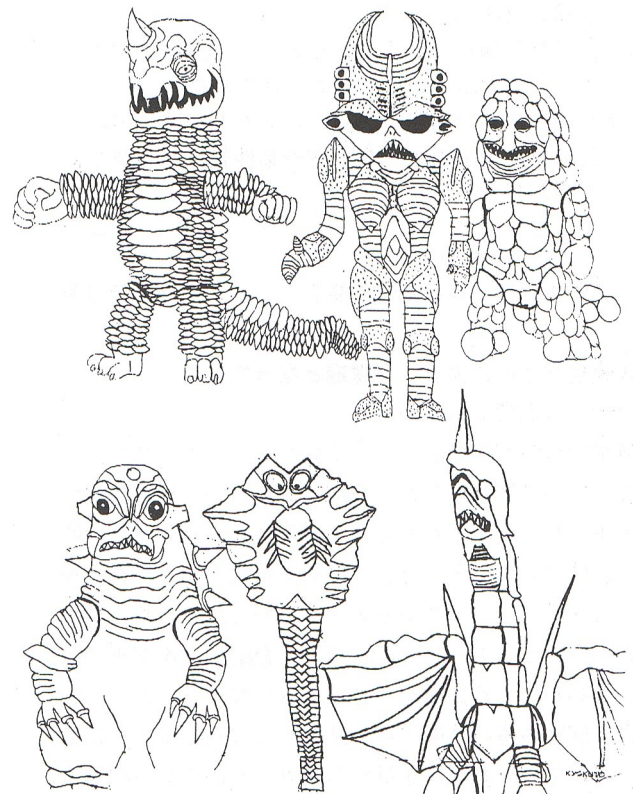


図5. 「6年生の時ノートに描いた絵」

(Ⅲ) 各学年を担当された先生方への質問

1. 学級経営上の工夫および課題となったこと、困難と感じたこと
 - (1) 指導の形態や方法の面で
 - (2) 子ども集団に関して
 - (3) その他
2. 学年全体についての工夫および課題となったこと、困難と感じられたこと
 - (1) 学年の他の先生との意見交換や調整に関して
3. 武内さん自身に対する配慮や工夫および課題となったこと、困難と感じられたこと
 - (1) 学校での日常生活面
 - (2) 教科学習の面(教科によって異なる場合には、教科ごとに)
 - (3) 対人関係の面
 - ① 同級生との関係
 - ② 先生との関係
 - ③ その他の人々との関係
 - (4) 集団で行動する場面において
 - (5) その他
4. 武内さんの家庭とのコミュニケーションや連携についての工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと
5. 介助員の方とのことについての工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと
6. その他、武内さんの通常学級での教育について考えや感じていること
7. 一般的な質問：
 - (1) 通常学級に「障害のあるお子さん」が在籍する、共に学ぶということについての考え
 - (2) 通常学級で障害のある子どもたちが共に学ぶためには、どのような配慮や条件整備が必要だと思われるか

【1, 2年生担任：高田彬成先生】

2002年3月

1. 学級経営上の工夫および課題となったこと

(1) 指導の形態や方法の面で

一斉学習の時間では、とにかく武ちゃんが外へ飛び出さないように気を配りました。介助員さんがいない時は、かたぐるまをして授業をしました。全員にわかりやすく説明しなければならないときは、どうしても武ちゃんに動きを抑えてもらうよう、ぬりえやめいろの紙を渡したり、粘土作業をしてもらったりしました。介助員さんが来てからは、安心して一斉指導ができるようになりました。

一方、個別指導の時間では、武ちゃんに対しても個に応じた指導ができました。子供たちそれぞれが異なる課題をしていますので、武ちゃんに寄り添って学習することが比較的できる時間でした。

(2) 子ども集団に関して

「武ちゃんはクラスの大切な友達」ということを繰り返していました。「みんなと同じように、静かに並んだり、一人で準備や片付けをしたりするのが苦手だけど、頭が悪いとか病気とかではなくて、ただちょっと得意じゃないだけなんだよ。だから一緒に勉強して、教えてあげるところは教えてあげてね。」といました。

子どもたちは学習中だけでなく、休み時間でもよく武ちゃんにかかわり、私以上にコミュニケーションをとっていたように思います。

2. 学年全体についての工夫および課題となったこと

(1) 学年の他の先生との意見交換や調整に関して

毎日必ず武ちゃんの様子を話すようにしていました。そして、学年集会の時には、積極的に武ちゃんにかかわってもらえるように預けるつもりでいました。しかし、他の先生も、自分のクラスにさまざまな問題を抱えていましたので、それほど頻繁に武ちゃんとかかわることはできませんでした。

3. 武内さん自身に対する配慮や工夫および課題となったこと

(1) 学校での日常生活面

できるだけ、武ちゃんの行動のペースを崩さないように気をつかいました。他の子どもには、「早くして」とか、「こっちを先にやってからつぎにこっちね」とか指示しましたが、武ちゃんにはあまりそういうことは言いませんでした。武ちゃんは、私からの指示がなくても、友達の行動を見ながら自分でペースを作っていたように思います。強制されるのを嫌がっていましたので、武ちゃんに出す指示は、まわりの子を動かし、間接的に武ちゃんにわかってもらうようにしていました。

(2) 教科学習の面

当初、もっとも苦勞するだろうと思っていましたが、お母さんが「勉強は二の次でいいです。わからないことはわからないままでもいいので、なるべく一緒のことをさせてください」とおっしゃったので、ずいぶん楽な気持ちになりました。

実際、武ちゃんが友達と同じようにできるのは、30%くらいでした。板書したことはノートに写して帰り、次の日にはノートに答えを書いてもってきました。家庭での努力が並大抵ではなかったと思いました。

(3) 対人関係の面

① 同級生との関係

まがって友だちに危害を加えてしまわないかと心配していました。武ちゃん自身、攻撃性のある子ではありませんでした。勢いあまって友達を傷つけてしまわないかと

心配していました。しかし、友達とのトラブルはほとんどなく、安心しました。むしろ、まわりの人が武ちゃんにちょっかいを出す場面が見られましたので、その都度注意し、武ちゃんが嫌なことはしない約束を徹底しました。

② 教師との関係

はじめは、私の指示も通りにくかったのですが、共に過ごす時間が増えてくると、武ちゃんも次第に私を認めてくれるようになり、信頼関係ができたように思いました。こちらが伝えたいことは大体わかってもらえていたように思います。

「だめ」ということばに強い拒絶反応を示していましたので、極力使わないようにし、3回まで「こうしようね」と言ってみて、それでもこちらの要求が通らない時は、3回目は言わず、少し時間をあけるようにしました。指示が通らない時は、武ちゃんが他に何かをしたい時なので、時間をあけるとある程度満足し、こちらの言うとおりにしてくれることが多かったように思います。

③ その他の人との関係

人とかかわりが苦手でしたから、必要以上にたくさんの人とかかわらなくてよいと思っていました。決まった人と決まったことについてかかわることができれば、それでよしとしました。

(4) 集団で行動する場面において

全校で並んでいる時、よく声を発しました。また、列からはなれて、うろうろすることもありました。しかし、はじめから終わりまでそうした目立つ行動をしていたわけではありませんでしたので、強くは注意せず、列を離れたら連れ戻し、大声をあげたら口元で「シー！」をやる程度にとどめました。はじめの頃は、他の学年の子どもが振り向いて武ちゃんを見ていましたが、そのうち振り返らないようになりました。武ちゃんの発声も、だんだんと少なくなっていきました。

どうしても一人で勝手に動かれたら困るときだけ、傍らで手をつないでいました。子ども同士では手を離してしまいましたので、私が手を握っていました。

4. 武内さんの家庭とのコミュニケーションや連携についての工夫および課題となった事

お母さんは熱心な方で、本当によく勉強なさっていましたので、私も武ちゃんのことについて教わるところが多かったです。ただ、私は立場上、常にクラス全体を見ていなければならなかったため、「武内君もクラスの一人として、私にとっては32分の1(32人のうちの一人)であり、目が行き届かない点がありましたらお許しください。」と言いました。すると、お母さんは、「わかっています。」と教えてください、ほっとしたのを覚えています。ただ、現実問題としては、32分の1とは到底なり得ず、マネージメン

トの多くを武ちゃん一人に費やしたことは確かです。しかし、特別扱いされるのを嫌がるだろうと予想していましたので、あくまでも友達と同程度ということを確認しました。

はじめは授業中、頻繁に参観にいらしていましたが、お母さんも納得されたのか、しばらくするとあまり授業を見に来なくなりました。連絡は連絡帳や電話で直接ということに落ち着くようになりましたが、私の方でさほど負担に思ったことはありませんでした。私がこんな様子でしたよ…と話す、すべてわかったかのように、何度も同じ事を聞いてきたり、もっと詳しく聞こうとしたりはしてきませんでした。そんなお母さんの対応も、私にゆとりを与えてくれたのだと思います。

5. 介助員の方とのことについての工夫および課題となったこと

1年生の時、私一人では、どうなっていたことやらと思います。

はじめに介助員さんには、武ちゃんを中心にお願いしますが、1人だけにはつかないほしいと言いました。それは、「武ちゃんは介助の先生にまかせておけばよい」という思いを、友達にもたせないためです。したがって、子どもたちにも、武ちゃんのために先生が一人増えるということは言わず、高田先生のお助けマンがやってきたと言いました。実際、学習中は、武ちゃんが一人でやっているときは他の子にマンツーマンでついてもらいましたし、あえて私が武ちゃんにつき、他の子どもを介助員さんをお願いするという方式も随時とりました。それにより、介助員さんはたくさんのお母さんたちから慕われ、頼りにされていました。そして、介助員さんを通して、武ちゃんと友達との距離も縮められる結果となりました。

介助員さんとは、学習に関して、事前に綿密な打ち合わせをしたことはほとんどありません。その場その場で連携をとり、私の動きに応じてサポートに入ってもらいました。武ちゃんが一人でできることは、なるべく一人でやらしてもらおうようお願いしてありましたので、武ちゃんべったりということは考えられませんでした。

とにかく、私も介助員さんも、きわめて自然体で、日々、臨機応変に対応していたのが、堅苦しくなくて良かったのではないかと思います。(はたから見ると、いい加減と思えるかもしれませんが…)

6. 武内さんの通常学級での教育について考えること感じていること

武ちゃんは十分ではないかもしれませんが、恵まれた環境の中で小学校生活を過ごせたのではないのでしょうか。特に、介助員の予算が確保されたということがもっとも大きかったと思います。家庭でどんなに努力されても、学校のキャ

プ員の指示もあったようです。

(3) その他

武内君が、何を伝えようとしているのか、何をしながらしているのか等を掴むことが難しいと思います。3年の時に見られた、突然走りだす、壁やドア、ロッカーに体当たりする等の行為は、5年になってからはほとんど見られなくなりました。しかし、取り組んでいることを急に中断させられたり、嫌がることをさせられたり、しつこくされたりすると泣きながら怒り出すことも見られました。

◎ 生活面では、身の回りの整理整頓が上手であること、話を聞いて行動できること、乱暴な言動をしないこと、話しかけると反応してくれること、子供同士ではなんとなく通じ合えること等があり、特別な工夫をしなくとも楽しく集団の中で過ごせていたように思います。又、学習面では、漢字が書けること、文字が丁寧で上手であること、絵やイラストが上手であること等、周囲から認められるものがあるため、落ち着いた学習態度と言えます。一言で言えば手のかからない子と言えます。しかし、介助員の存在は大きく、又、伸びるためには必要な存在です。担任一人では無理と思います。

2. 学年全体についての工夫および課題となったこと、困難と感じられたこと

(1) 学年の他の先生との意見交換や調整に関して

特別問題になることはなかったと思います。行事(運動会や学習発表会、卒業式や入学式練習)の中でも、他の子どもたちと同様、武内君の活躍できる場面は十分取ることが出来ました。

3. 武内さん自身に対する配慮や工夫および課題となったこと、困難と感じられたこと

(1) 学校での日常生活面

3年の時は、介助員の声かけが必要だったものの、5年になってからは、周囲にいる子どもたちに、「仲間に入れてあげて」「一緒に遊んで」等と言っておくと一緒に行動出来ていました。又、前以て、「次は〇〇だよ」「今度は〇〇をやるよ」「〇〇さんがこんなことをするから一緒にしておいて」等と伝えると、自分から集団の中に入って行くことも見られるようになっていきます。

(2) 教科学習の面(教科によって異なる場合には、教科毎に)

他の子どもたちと同じ内容を学習してきました。国語の本読みも、漢字の書き取りも良く出来ています。作文は何を伝えたいのか読み取れません。算数の計算は3年5年の内容はますます出来ています。ワーク(テスト)の結果を見ると、問題文の読み取りは出来ているようです。文の中から答えを見つけることは出来ますが、自分の考えを書く

ことは不十分(担任が読み取れないだけかも知れません)です。音楽の歌や楽器演奏、図工の絵や工作等は良いものが見られ、取り組みも積極的です。家庭科の調理実習では火(熱さ)を怖がります。体育は恐怖感のある種目には消極的ですが、周りの子どもたちの様子を見てから慎重に取り組み始めます。バスケットボールをしている時、急に機嫌が悪くなり、介助員に訳を聞くと、どうやら自分にボールが回って来ないことにあったようです。チームの子にそのことを伝えボールを回すと機嫌が直りました。相手チームからもボールを回してもらっていました。子どもたちの優しさに感謝した一瞬でした。各教科、武内君だけの特別なメニューは用意しませんでした。他の子どもたちと同じように、必要に応じて指導をしてきました。

(3) 対人関係の面

① 同級生との関係

特に、5年になってから人と遊ぶ場面が多く見られるようになりました。追いかける、話し合う、一緒に縄跳びをする・注意する・自分から挨拶するなど見られました。話し合う場面を見て、後で話していた子に「何を言っていたか分かる?」と聞くと、何となく分かる、大体分かる、分からないときは適当に聞いている等の応えが返ってきました。担任はほとんど分かりません。言葉以外の部分で理解し合っているようです。一緒にいる時間が長い子の方にその傾向が強く見られます。高学年になると女の子が嫌がる言動をする子が見られますが、武内君にはそのような言動は見られず、女の子たちに嫌われることもなく、逆に、色々な場面で支援を受けています。性格の良さなのでしょう、それとも、家庭の指導なのでしょう。武内君は・3年の時もそうでしたが、学級の子もみんなの名前を全員知っており、座席も分かっています。学校の先生方も関わった人達は知っています。

② 先生との関係

3年の時以上に側に来ることが多くなりました。時には、いたずらをして逃げて行ったり、隠れたり、何か言われるのを待っていたりすることが多くなりました。朝や帰りの挨拶も毎日のようにしてくれます。しかし、こちらから急に話しかけても反応してくれないことも多くあります。最近、話し方が担任に似てきたようで心配です。友達を叱ったり、注意したり、呼んだりする言葉が似てきたようです。時々、ドキッとすることがあり周りの先生方にも良く言われます。乱暴をしない、話を聞く、丁寧な作業、片付けの良さ、等など、学級のお手本になってくれる子です。

③ その他の人との関係

学校内では、校長・教頭はもちろん、関わってくれた先生方は良く知っています。又、給食員や用務員など、教えると分かってくれます。知らない人や関わりの薄い人達には、話しかけられても反応しないことが多いようです。

(4) 集団で行動する場面において

特に5年になってからは、特別な工夫も困難な場面はありません。朝会や体育の時間、校外学習や学年全体での行動などの時も、誰の助けも借りずに自分の場所に集まります。時には、周りの子たちの指示を受けていることもあります。2泊3日の自然教室では、環境の変化もあるので心配しましたが、落とし物、しまい忘れがあっただけで、特別問題になることは見られませんでした。注意しなければならぬ子は他にたくさん見られたことが残念でした。

(5) その他

担任や介助員がどんなに配慮しても、又、保護者の要望を聞き入れても、学級集団が武内君を認め、理解しなければ、彼の居る場所は出来ません。幸い、学級の子どもたちは大小の違いはあるものの、1年入学の時から彼の存在を知り、彼を認め、理解してきた経過が今現在の対応になっているのだと思います。担任は学年学級の子どもたちに感謝しています。

4. 武内さんの家庭とのコミュニケーションや連携についての工夫及び課題となったこと、困難と感じたこと

学級の様子や行事の予定、学習進度、準備して欲しい物など、学級通信を発行して各家庭に知らせるようにしてきました。今年度(平成12年度;筆者注)は213号の発行になりました。高学年になると、翌日の予定や持ち物などは、口頭で伝えたり・板書で済ませることが多くなりますが、武内君は自分で連絡帳に書いて行くことが出来る子なので安心していました。口頭で伝えた時は、介助員が連絡帳に書かせるようにしてくれました。それでも連絡が完全には出来なかったこともありました。保護者からはメモ帳を預けられ、必要なことはメモで知らせたいとの要望もありましたが、長続きしませんでした。知らせる方(用件)も知らされた方(返事)も書く作業は大変労力が要るものです。介助員と保護者の連絡はノートを使って続けられていたようです。ノートの内容は一度も見ていません。

保護者(特に母親)は、心配なこと、確認したいこと等が出来ると、必要に応じて来校し面談して行きました。他の保護者がそうであるように、必要に応じてお互いに連絡を取り合えれば良いと思っています。幸いなことに・担任は武内君の保護者には信頼されていると感じていました。しかし、どんな面で信頼されているか分かりません。思い違いだったかも知れません。多くの保護者の方は、子どもの学習面が気になるものです。すべての子が学習内容を完全に理解出来るものではありません。そのことに気づいてくれるような対応をして来ました。今時っている良い面を伸ばすことの大切さを学級の保護者の方に伝えるようにして来ました。

5. 介助員の方とのことについての工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと

武内君への対応についての細かな打ち合わせはしていません。3年の時もそうでした。しかし、引き継がれて来たことがあったのでしょうか。担任が望んでいることの多くをしてきていたように思います。3年の時の介助員は教員と同じような取り組みをしていました。5年になっての介助員は、介助員から徐々に教員風になって来ました。工夫も少なかった分、困難と感じることもありませんでした。

勤務時間が同じでもなかなか打ち合わせをする時間が取れません。まして、勤務時間が違うと工夫のための相談をする時間も取れません。

6. その他、武内さんの通常学級での教育について考えや感じていること

武内君だったから通常学級で生活出来たのかなとも思います。他の子どもたちと比べて、武内君が勝っている面が色々な場面で見られました。介助員がついているから、更に伸びて来た面も多くあると思います。又、西楯ヶ谷小の5年生たちの対応の仕方にも良い面があったと思います。みどり級の二人の児童と武内君たちと共に育て来た5年生には、自分たちと違った仲間がいるというところを、体験を通して理解し、認めているようです。乱暴な子でも、意地悪な子でも、三人に対する態度は優しさ(上辺だけの子もいるようですが)にあふれていると思います。

7. 一般的な質問:

(1) 通常学級に「障害のあるお子さん」が在籍する、共に学ぶという事についての考え

「障害」の程度によると思います。「奇声を発する」「暴力的である」「立ち歩きが激しい」等の症状がある子は無理のような気がします。しかし、対策が考えられれば「共に学ぶ」という事には賛成します。川崎市が各学校に特殊学級を作り始めた頃、「なぜ分ける必要がある」「どうして分けなければならないのか」、仲間内で議論したことがありました。

(2) 通常学級で障害のある子どもたちが共に学ぶためには、どのような配慮や条件整備が必要だと思われるか

施設設備面の配慮: エスカレーターやエレベーター等の設置
今以上の安全設備(転落防止の相等)敷地、校舎内のバリアフリー

冷暖房、防音、照明等を自由に操作出来る装置

医療面: 保健室の充実

学校医と掛かり付けの医療機関との連携

複数の養護教諭の配置

教職員: 学級を持たない教員(教員でなくてもよいが)の複数配置

児童児童に関して、教職員の共通理解を図る研修

時間の確保

教職員一人一人の積極的な関わり、一人一人の児童理解

保護者：子どもの権利を要求するだけでなく、PTA 会員としての義務を果たすことも

障害のある子どもの教育に関し、感じていること、考え等。生まれて来た社会は一つ、生きて行く社会も一つ、教育を受ける期間だけを分ける必要はないと思います。しかし、障害に応じた適切な配慮や指導は必要だと思います。

【4年生担任：小松博樹先生】

2001年3月

1. 学級経営上の工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと

(1) 指導の形態や方法の面で

絵や字がうまいので、よく紹介した。また絵は、クラス文集の表紙に使ってみんなに配った。

2. 学年全体についての工夫および課題となったこと

(1) 学年の他の先生との意見交換や調整に関して

3. 武内佑樹さん自身に対する配慮や工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと

(1) 学校での日常生活面

給食で好きな物があると、人の分にまで近寄って行って欲しがってしまうことがあった。

(2) 教科学習の面

水泳は嫌うため、ホースで水をかけたり、浅いところを歩いたりしていた。

学芸大会に4年生全員で合唱をして参加した。自閉の子は音が苦手だと思っていたが、武内さんなりに順応して取り組んでいた。

(3) 対人関係の面

① 同級生との関係

武内さんの行く手をさえぎって通せんぼをしたり、はやし立てて無理強いさせたりして困らせることがあり、話し合いをして対応した。

② 先生との関係

自分の思っていることが、うまく伝わらなくて、ドアに体当たりをして泣くこともあった。そのときは、抱きあげて、なだめた。

③ その他の人との関係

(4) 集団で行動する場面において

横浜港見学や卒業式の練習などでは、介助員の助言もあり、落ち着いて行動していた。

4. 武内さんの家庭とのコミュニケーションや連携についての工夫および課題となったこと。

障害児級に関するアンケート(教研レポート)をつくったが、事前に親の了解を得なかったため、発表されては困るという結論に至り、とりやめた。こちらが輪の配慮が足りなかった。

5. 介助員の方とのことについての工夫および課題となったこと、よかったこと

校庭あそびにもよく付いてくれ、その様子を聞いて知ることができた。ただ、介助員が女性の方なのでトイレの中までは付くことができず、困ったこともあった。

6. 武内さんの通常学級での教育について考えること感じていること

一年生からの入学ということで、学年の子どもに普通に溶け込んでいる感がある。全校的には、知り合うことは難しい面があるだろう。

7. 一般的な質問

(1) 通常の学級に「障害のある子ども」が在籍し、ともに学ぶことについてどう思うか

お互いのために、よいことだと思う。いっしょに学ぶことで、障害のあることもひとつの個性だと思える子供が増えてほしい。

(2) 通常学級で障害のある子どもがともに学ぶためには、どんな配慮や条件整備が必要だと思うか

やはり、1人の担任では難しい面もある。介助員や、T.T.体制など、人員整備が何より必要である。それと、奇声を発するような障害であれば、学習(思考)が中断してしまうこともある。それにも慣れていく時間が必要だろう。

【6年生担任：金津有作先生】

2001年10月

1. 学級経営上の工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと

(1) 指導の形態や方法の面で

なし

(2) 子ども集団に関して

なし

(3) その他

特に困難と感じたことはありません。作業等、途中でやめて次の時間に・・・ということができない(仕上げたい、最後までやる)という意味が強いことで、声をかけるタイミングがむずかしいと思ったことくらいでしょうか。

2. 学年全体についての工夫および課題となったこと

(1) 学年の他の先生との意見交換や調整に関して

なし

3. 武内佑樹さん自身に対する配慮や工夫及び課題となったこと、困難と感じられたこと

(1) 学校での日常生活面

すべて自分で処理できます。

(2) 教科学習の面

ほとんど介助の方が個別にかかわってくださるので特に困ったことはありませんが、体育は苦手なものが多く、ルールもなかなか理解できないため、特にゲーム系のものにどう取り組ませたらと思ったことはありました。

(3) 対人関係の面

① 同級生との関係

とてもよい関係だと思います

② 先生との関係

—

③ その他の人との関係

—

(4) 集団で行動する場面において

周囲の様子を見て、自分で行動しています。その際、周りの子どもたちも必要に応じて声かけしてくれています。

4. 武内さんの家庭とのコミュニケーションや連携についての工夫および課題となったこと。

特にありません。

5. 介助員の方とのことについての工夫および課題となったこと、よかったこと

できるだけ普段から、いろいろな話をして、意思の疎通を図っています。

6. 武内さんの通常学級での教育について考えること感じていること

まわりの子が受ける影響がとても良いものが多いと思います。お互いに成長のきっかけになればと思います。

7. 一般的な質問

(1) 通常の学級に「障害のある子ども」が在籍し、ともに学ぶことについてどう思うか

障害の程度によるのではないのでしょうか。学校としてやらなければならないことも多いので、周りの子どもたちに手をつけられなくなるような状況になっても困りますので。

(2) 通常学級で障害のある子どもがともに学ぶためには、どんな配慮や条件整備が必要だと思うか

たくさんの子どもの先生一人という考えにとらわれず、どの子どもも教育を受けられる権利が守られるような対応をしていけたらと思います。

【パソコンクラブの担当：飯田智芳先生】 2002年3月

○ 4年生

クラブの部員数が20人以上あり、コンピュータの台数は7台しかなかった。つまり1台につき3人ほどで活動を行った。

武内君は『ハイパーキューブ』のお絵かきで絵(動物園)をかいていた。まわりの子が手伝おうとすると「もういい。」と言って手伝ってもらうことをいやがっていた。そこで、時間を決めて交代で活動することになり武内君も時間までおとなしく待っていた。時には自分の時間が近づくとうれいいのか教室を走って行って壁にぶつかる行動をしていた。時間が足りなくなった時などはグループの子の配慮でやらせてもらっていた。とはいえ自分が納得するまで終了しなかった。そのため一度だが、下校がおくれてしまった(4時過ぎ)こともあった。まわりの活動には興味があり、自分の番でないときにはのぞきに行くこともあった。しかし興味をもったことを自分でもやることは一度もなかった。

絵のかき方は、自分がかきたい動物をかいてからまわりをかいていくという方法で、順番はいつも同じだった。

○ 5年生

4年生と同じで、『ハイパーキューブ』のお絵かきで絵をかく作業を続けていた。クラブの部員の人数が減り1人または2人で作業をしていた。始めのうちは4年生の時と同じで動物園の絵だったが、やがて海の絵を描くようになり、スタンプ(始めからソフトに入っているキャラクター)の拡大による手直しを用いた絵に変わっていった。スタンプの絵は3段階に大きくすることができるので、大きさの違うキャラクターを出して、画面に配置し、その後色を変えていた。作業はとても時間がかかったが一度も記録せず、1時間ごとに1画面を完成させて活動を終えていた。

2学期からはゲーム機を2台入れて活動できる機器の数を増やした。その中に『タレントスタジオ』というソフトとがあった。自分がタレント(登場人物)を作ってあらかじめ決められた動作を演じさせることができるというソフトである。紹介したとき武内君は興味を持ったらしく興奮気味で見入っていた。他の子に占領されてしまったこともあり、興味があるが一度もやらずの状態だった。やっている子のそばに行けばしばらく見て、うれしそうに教室を飛び回ってから自分の場所にもどっていた。

○ 6年生

6年生になるとクラブ部長に立候補した。クラブの始め終わりの挨拶と部屋の電気を消す仕事をほぼ自分からやることができた。言葉の足りないところは、副部長の5年生の子が手伝って挨拶を行なった。

当初から『タレントスタジオ』をやりたいと宣言。『タレントスタジオ』に夢中になった。

人数が少なかったので機器は独占することができた。同じ場所に自分から機器をセッティングし作業していた。何度か作るうちに気に入ったタレントが完成した。どういうわけか顔や服は白のままだった。一度「色をつけないの」と聞いてみると、しばらく返事をしなかったが「いいの。」と突然叫んでいた。その後はこのタレントに設定されている動作のすべてを行わせ、眺めていた。その間新しいものは作らなかった。

11月にコンピュータ台数増えた。コンピュータ室の整理のためにゲーム機を片づけてしまった。その後すっかり忘れて出さないでいたが、武内君は何もいわなかった。

武内君はインターネットからキャラクターのダウンロードする作業をしていた。同じ趣味の4年生の子が隣に座った時は、いつもになく4年生の冗談に笑ったりちょっかいを出したりして楽しそうに過ごしていた。

クラブ最終回では、『がんばり賞』を各自が作った。なかなかやらなかったが、担当の教師が促すとやり始めた。できあがり、文面を読んで武内君に手渡した。うれしそうに受け取り教室を走り回っていた。

(IV) 先生方全体への質問(担任をされた方を含む)

2001年3月実施

1. 通常の学級に「障害のあるお子さん」が在籍する、ともに学ぶということについてのお考えをお聞かせください。
2. 通常学級で障害のある子どもたちがともに学ぶためにはどのような配慮や条件整備が必要だと思われるか、お考えをお聞かせください。
3. その他、障害のある子どもの教育に関し、お感じになっていること、お考えなどがありましたらお聞かせください。

1. 通常の学級に「障害のあるお子さん」が在籍する、ともに学ぶということについてのお考えをお聞かせください。

- (1) 子どもたちにとっては多に良いことだと思う。互いに理解しあう場になる。ただ教員への負担は大きい。
- (2) まわりの子供たちの成長にとっても、大切なことだと思う。
- (3) 大変意味のあることだと思います。武内さんの様子を見て改めて感じます。しかし、その個にとって、本当につけさせたい力は何なのか、個別で基本的な生活習慣をしっかりときめこまかく指導したほうがいいのかを見極めていく必要があると思います。また、「ともに学ぶ環境」の確保ができるかどうか、重要な問題だと

思います。

- (4) 「たいへんさ」が障害のある子にも、他の子にも、あることは事実です。でもあるレベルを越えると「たいへんさ」が「楽しさ」に変るときもあります。ひとつの経験として、子どもたちには、体験させたいことのひとつと考えています。
- (5) 共生は、もう当然のことだと思う。その子にとっても、また一緒に学ぶ子ども達にとっても、小さいうちから、あたり前のように生活させることが大事だと思う。
- (6) 障害によって、お互いの関わり方は、かわると思いますが、同じ仲間として、気持ちを伝え合おうとする態度が育つと思います。
- (7) その子どもへの願い、どういう風に育ててほしいかを考えたうえで、周囲の理解、配慮が必要に思う(集団の中で学べることも、多々あると思うので、その・・・でのメリットも感じてはいます)。

2. 通常学級で障害のある子どもたちがともに学ぶためにはどのような配慮や条件整備が必要だと思われるか、お考えをお聞かせください。

- (1) 親の理解。教員同士の協力。負担の軽減。
- (2) 教員の共通理解、父母との連絡、子供にとっての存在の意味を日頃からはなすこと。
- (3) まず、T.T.体制が必要だと思います。障害のある子イコール特別に配慮を要する子と考えれば、当然担任一人では無理が生じます。そうなれば、その子にとっても、まわりの子にとっても不幸なことです。
次に、学習集団全体を見渡し、指導上配慮を要する子が何人もいるようでは、学級は混んとしてしまいます。理想はあっても、現実的に難しいときは、やるべきでないと思います。
さらに、保護者との意思疎通も重要です。こちらの考えも聞き入れながら、よい方向性を考え合っていける保護者の態度がないと、問題をこじらせる可能性があると思います。
- (4) 「特別視」とか「自分と異なっていることへの排除」とかいったことは、よく通常級の子供同士でもみられます。このことは、口だけで通るような問題ではないと思います。頭ではわかっている、実際にはできない姿が多くみられますので、少しずつ「みんなで作る」、「みんなとやる」ということの、楽しさ、大切さがわかる環境づくり、これは学級だけでなく、学校単位まで広げて、行っていかなければうまく進まないと思います。
- (5) 何よりも人的(教師側)配慮が必要。特別な教育ニーズを持つ子には、それなりの体制作りが絶対必要。なんでもいっしょに・・・という思いは気をつけなければ成らないと思う。

- (6) 常学級の児童にも配慮されるべきことですが、個の状態にあわせ、必要に応じて一対一の関係を築ける担任以外の教員。また、個別になれる教室の確保。
- (7) 障害にもよるし、その児童の性格にもよると思うが、その子を理解しようと思う周囲の気持ちを敏感に感じる子どもたちだと思うので、障害を含めたその子自身を見つめること、知ること、が、大切だと思う（ことばかけや、環境整備も含めて）。

3. その他、障害のある子どもの教育に関し、お感じになっていること、お考えなどがありましたらお聞かせください。

- (1) 障害をどのように定義して考えて（とらえて）いくかによって違う。通常級に在籍しているからすべて健常児と考えるのはおかしい、これだけ「個」が叫ばれているなかで、目に見えるものだけが「障害」ではないと思います。
- (2) まずハンディを受け入れる、認めることが大切であると思う。
- (3) 教育の中にも、インスタント志向（できるだけ容易に、おいしいところを、自分だけがうけとる）が強いように思います。それだけに、地道に努力している方の姿がかき消されてしまうのが、残念でなりません。まともに言えば、きちんとやっているといっても、実際とは違うようです。なんとかしなければとジレンマを起こしています。
- (4) 親族に障害を持っている中学生がいるので、その子の将来と重なって考えることがある。自分の力で生きていくために、やはり今の教育と、社会参加を充実していきたいものです。
- (5) 子供の後ろにいる親の考え方がさまざまで難しい。理解しあうには、時間が必要だし、第三者の機関（専門機関）にはいってもらうことも必要だと思う。
- (6) 基本的生活習慣が確立している子どもに関しては、集団の中での様々な刺激、学校ならではの経験をすることは大切に思う。小学校の（特に低学年？の）うちは、自分のことは自分でする、できるようになるための学習、安定した学校生活を送れるように配慮していくことも大切に思う。

(V) 担任をされた先生方へのインタビュー

2002年1月22日実施

1. 佑樹君の最近の様子と今後について思うこと
2. 「障害」のある生徒を受け入れるための条件整備について

【経過と最近の様子】

（小松）最近接する機会がないが、これまで介助員がいる状況でやってきて、そのような関係が中学でつくれないとどんな状況になるのか心配だ。担任との1対1と子どもの1対多数だとどんなふうに関係ができていくか、彼が自分の意思を表現できないと難しい面が出てくるのだろうか。

（金津）中学の障害児学級のシステムがわからない。1月25日に中学の先生が授業を見に来るとのことだが。

（飯田）興味の対象がどこにあるのか。彼はパソコンクラブを3年間続けてきた。パソコンを他の子が使っていて自分ができない時も待っていた。1学期間待っていた。6年生になって委員長には自分が立候補してなった。委員長になることが決まった時、走り回ってドーンと壁にぶつかっていた。本当に嬉しかったのだろう。

（金津）お昼の時間にクラスでビデオを流すのだが、映像等中心で会話がわかってきているのか、ストーリーが分かっているとは考えにくい。絵もウルトラマンと怪獣を描いているが、描いているもの同士のやりとりの場面や、そういったことを描いていくということは見られない。

（高田）こっちが言っていることがわからないと空振りと感じたことはなかった。お母さんの努力と友達の支えで、表情、身振りを彼なりに再構成してコミュニケーションの力として使う力があるのではないだろうか。

「集団帰属意識」ということについてだが、1年のときは（「自閉症という」；筆者注）障害の特性そのものが現れていた気がする。しょっちゅう肩車をしていた気がする。しかし、1年後期から2年生になって周りを意識した行動に変わっていった。プリント、絵、板書を写すなど周りと同じようにやるようになっていった。並んでいて声を出したりして他からうるさいと言われることも有ったが、自分の居場所として学校がわかったという感じだった。彼にとってクラスに安心して座ってられる支えのようなものがあったのではないか。

（滝坂から質問）「自分の居場所として学校がわかる」ということはとても大切なことだと思うが、そのためにはどのような配慮が必要なのだろうか？

（高田）その都度の配慮はしたが、特別扱いした覚えはない。障害があるからということで接したことはなかった。介助員の方も彼に付きっきりということではなかったし、彼よりも文字が書けない子どももおり、その子の様子を見ることが自然に行われていた。

障害児学級からの交流では障害児学級の担任が入っていた。そこに何か隔たりのようなものを感じてしまう。

（金津）「武ちゃんは1年生の時こわかった」とある女の子が言っていた。1年生のとき、「彼は周りの子どもたちにとっては」；筆者注「異質」だったのではないか。今彼に対して何か、例えば手助けにしても「やり過ぎる」とい

う子はいない。本人が自分でできることは任せている。授業が終わるとずっと自分から動く。周りの子たちが何かを始めるとあたりを見て同じように動く。例えば、<笛グループ>がこれから練習することになったような時に、本人がそれを分かっているなくても一言「笛持ってくるんだよ」と言われれば、それで練習には参加していきける。

2学期から変えてみたことがある。それは、介助員の方の座る机の位置を、本人の座っている位置から最も遠く、しかも様子が見えやすい教室の反対側に替えてみたことだ。できるだけおとなの手をかけないようにしてみましょうと介助員の方にはお話した。

(北林) 彼には頑固なところがあって、やっていることに一区切りがつかないと次に行かないというところがある。3年の時にはそれを待つしかなかった。5年になった時にはそれが随分緩和された。こういったとき介助員の方がかわってくれて随分助かった。

(飯田) パソコンクラブでもやっていたものが終わらないと帰ろうとしなかった。

(北林) 3年の時に草むらに入ることができなかった。虫が飛び出すのがいやだった。生き物もきらいだった。ひよこを教室に持っていった時も、全身が固まってしまって、遠くから鳥に対して怒っていた。その時は最後まで触れなかった。でも、5年のときの後半には自分から草むらに入るようになっていた。稲刈りもした。秋に初めは大根が抜けなかった。手に葉がチクチクするのが嫌だったようだ。何日かしてお母さんと来た時に自分で抜けた。見ててやろうという気になってできる。慣れてくれば動ける力を彼は持っている。水栽培でヒヤシンスを育てていた時のことだが、大事に持って帰ろうとしたのだが何かの拍子で茎が折れてしまった。彼はそれをセロテープで丁寧に付けようとしていた。

やることはとてもいいで、電磁力のコイル巻きも一番丁寧にやっていた。手を出そうとしたら怒られてしまった。

(金津) 怒る時の表情はわかりやすいのだけれど、喜びの時がわかりにくい。

(北林) 他の子が認める彼の力というのがある。そういう面があって認められるというところが子どもにはある。3年の時には、漢字だった。オレよりできると思っている子がいっぱいいた。5年の時には観察ノートだった。彼は、誰より早くきれいに描く。明らかに皆から認められていた。総合着、体操着みても彼のはきちんとたたんであるからすぐ分かる。

(滝坂) 10月末に体育で跳び箱の授業を参観させていただいた時、とても驚いたことがあった。それぞれの力に合わせて子どもたちは何種類かの跳び方をしていた。彼は跳び込み前転をしようとしていたが、手をつかないために顔

から突っ込んでしまう。同じ列の子が、「武ちゃん危ないからこっちにしたら」と言って開脚跳びを示した。その後彼は開脚跳びをしていたが、時間の最後に金津先生が「じゃあ、今日練習した<技>を一人ずつ見せて」と言い、一人一人が次々と自分の<技>を披露した。彼の順番になって、きっと開脚跳びをするだろうと想像していた私の予想は打ち破られた。彼は見事な跳び込み前転をやったのけた。彼は開脚跳びをしながら、他の子のやる飛び込み前転を見、自分もやりたいと強く思っていたに違いないと思った。

(北林) 彼は3年生のとき跳び箱を跳べなかった。

(金津) 彼が跳び込み前転ができたのは、あの時が最初だ。跳び箱については、これまで「乗せ上手」の子が教えてやらせてきた。こちらから見るとやりすぎるぐらいからかかっていることがあるけれど、そのことで本人ができるようになったり助かったりしていることが多い。

(北林) 悪いことを教えようとする子どももいるけれど、女の子たちが防波堤になってきた。

(飯田) パソコンを前に、いつも同じページしか開かない。同じ場面を繰り返し見て喜んでいて。彼が何に、どの部分に面白さを感じているのかがうまくわからないことが多い。

【条件整備について】

(北林) 普段はあまり考えていない。武内さんのように介助員がいれば可能かも知れない。障害のある子とそうでない子とではスピードが全く違う。そういう中において障害のある子どもにストレスがたまらないだろうかということが気にかかる。その点、「交流」で来ている場合には両方のリズムが大切にされる。二つの集団が必要なのもかもしれない。「交流」は絶対に必要だと思う。通常の学級だけでは無理があるようにも思う。

(小松) 「違い」を認める姿勢を教師も子どもも持つということが重要だと思う。かかわらないと何もわからない。学年内でも「障害児学級がいいのではないか」という意見もあった。違いを越えて同じように皆の中で一緒にやっていこうという気持ちが保護者にとって学校生活がスタートできた。学校はどの子に対しても対応できるようにしていく。お互いにそういうところを皆でつくっていこうというのを出さないと駄目なのだと思う。

(北林) この学校は、「交流が嫌だ」という先生がいない。保護者がクラスに入るのを嫌がる人もいない。普通の感じで皆やってきている。

(飯田) 一般的なことだが、子どもに対して教師がはっきりした態度を示すことが大切であると思う。武内さんの場合には、いろんな人たちの目がうまく働いていたと感じる。そのような状態がつかれることが重要ではないか。

(高田) 途中にある学年から始めるのではなく、低学年から始めることが重要だと思う。仲間、母体となっている

クラスの子どもの柔軟性は低学年にある。初めはうまく行かないこともあるかもしれないが、それも当たり前だと捉えられるよう、共に学べるようなものがほしい。ただ、「絵が上手」とか「漢字が得意」とか、そういった得意なものがあるということは、彼(女)が活かされる場面があるということであり、周りの子がどう受け入れていくかということとも関連し、大きい。

(金津) 普通級で受け入れられる「障害の程度」ということもあるのではないかと。もし彼(「武内さん」; 筆者注)が「多動」で「乱暴」ということであれば状況は変わっていたのではないかと思う。一人の教員が40人で、どこからも救いの手がなかったらバンザイするしかない。障害にあわせてどう見ていったらいいかを柔軟に対応できるシステムがほしい。高田先生から聞いた状況で担任していたら、私は腰痛になっていただろう。

障害のことも自分達は十分に分かっていない。親、教員、学校がその子を介して学んでいけるようなかたち、関係が大切であろう。「どうしてあのようなになるんだろう」と学ぶ意欲さえあれば、随分やっつけられるように思う。

ただ、要求がへんに強い保護者の方だとやりにくい側面もある。保護者の方が柔軟であると、学校もそれに応じて動く努力をしやすい。

【クラスのサイズについて】

(滝坂) 今後、都道府県指定都市がクラスサイズを決められるようになる。私が昨日まで調査に行っていたドイツのある州では24~36人の範囲で決められるようになっていく。今後障害のある子どもたちが通常学級と一緒に学ぶことを考えた場合も含め、どのくらいのサイズがよいだろうか。

(金津) 20名だと集団として機能しない。専門家はいなくても、クラスサイズがもっと小さい必要がある。そのことによってクラスは安定する。「学習効率」、「社会のルールを学ぶ」という観点から考える必要がある。もめごとが起こって、そのなかで子どもたちは様々なことを学んでいく。少数のクラスというのは教員にとっては楽でいいかもしれないが、子どもたちにとっていいのかどうか、そこは実際的な検討と議論が必要な重要な点だと思う。

【西梶ヶ谷小学校内の仕組み】

(滝坂) 学校全体としての「障害のある子ども」への取り組みがどのようなになっているか。

(北林) 「障害児教育委員会」があり、学期に一回集まりを持っている。また、「児童理解委員会」があり、これも学期に一回の集まりがある。この他、5、6月の職員会議で取り上げることと、土曜日ごとの朝の打ち合わせで取り上げている。

【校長先生へのインタビュー：安達芳郎先生】 2002年3月

武内佑樹さんとの出会いは、彼が5年生になった時からである。

彼が学ぶ教室に行き、友達と何の違和感もなくごく普通に生活している様子を見て、低学年の彼の行動を聞いてただけに、その成長ぶりには眼を見張るものがあった。

正直に言って、普通級に障害をもつ子を受け入れることは、担任にとって大変に負担のかかるものである。その中で彼の成長は、市教委より補助指導員を配置してもらい、教師とりわけ担任と保護者の考えがうまくかみ合い、更には彼を取り巻く周りの友達が温かく接してくれたからこそだと思う。

高学年になると、宿泊を伴う「自然教室」や「修学旅行」の行事がある。保護者の方は、子どもが一日でも家から離れて宿泊することに不安がいっぱいであったろう。私にしても一抹の不安はあったものの、学校での普段の生活を見、担任からの話を聞き、更には保護者の方の協力を得て、改めて補助指導員を配置しなかった。彼に少しでも自信を持ってもらいたかったし、自立へのステップにしてほしかったからである。そんな願いのもと宿泊を伴う学習では、彼は学校生活と同じように活動し、見事に参加することができたのである。

障害をもつということの一つの個性と捉えるならば、お互いが相手を認め合い、相手の個性を受け入れることで本物の共生の社会を創世することができるのではないかと思う。

(VI) 補助指導員の方への質問

1. 補助指導員をされるにあたって考えたこと
 - ① 補助指導員とはどのような役割であると思いましたが
 - ② どんな配慮が必要だと思いましたか
2. 補助指導員をされるにあたって打ち合わせをした相手と内容
3. 補助指導員として配慮・工夫した点
 - ① 佑樹さんに
 - ② ほかに子供たちに
 - ③ 担任に
 - ④ その他
4. 補助指導員として行ったこと
 - ① 佑樹さんに対して
 - ② ご家庭(ご両親)に対して
 - ③ 学校に対して
 - (1) 担任に対して
 - (2) 校長・教頭先生に対して
 - (3) その他の方々に対して

5. 補助指導員をされた期間を通じて見られた出来事、成長や変化について
- ① 佑樹さんご自身(クラスでの様子、ほかの子供たちとの関係、担任との関係、意思の表現法、教科学習への取り組みやそのときの様子ほか)
 - ② 周りの子供たち
 - ③ 担任の先生
 - ④ その他の人々
6. 補助指導員として学校にかかわっていて感じたこと
- ① 学校全体について
 - (1) 一般的に
 - (2) 障害のある子供の教育に関することについて
 - ② 学級について
 - (1) 一般的に
 - (2) 佑樹さんを含めたクラスの様子・変化について
 - (3) 担任の先生の様子、変化について
7. 生涯のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けることについてのお考え
8. 今後、障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けるためにはどのような条件整備が必要だと思いますか、また、どのようなことが大切だと思いますか。
9. 上記以外に、補助指導員をなさって現在感じられていることなどを自由にお聞かせください。

【本前原 弘子さん (H.8.7.2~H.11.10.31, H.8~10 年度週4日、H.11年度週6日)】

1. 指導補助員をされるにあたって考えたこと

- (1) 補助指導員とはどのような役割であると思いましたが説明がまったくというほどないまま引き受けてしまい、はじめは通学の手伝いと思っていた。直前には、多動のため教室などから出ないよう見てるといような説明を受けた。
- (2) どんな配慮が必要だと思いましたが当時の担任から、あまりくっつきばなしにならないようお願いしたので、クラス全体を見ながら、武内君を気をつける必要があると思った。

2. 指導補助員をされるにあたって打ち合わせをした相手と内容

うち合わせ時私用のため、打ち合わせなし。

3. 指導補助員として配慮・工夫した点

- (1) 佑樹さんに
つきっきりにならない事。なるべくほかの子供たちとのパイプ役になること。クラス全体の中での祐樹さんの位置を考えること。
- (2) ほかの子どもたちに
低学年の時、担任の先生が、みんなの先生のような紹介

をしたので、クラス全体みんなと仲良くした。中学年時、人数が多かったので、いろいろと話を聞いた。

(3) 担任に

担任の先生の意見を尊重しながら、自分の考えを言う。こちらから、何をしてほしいか聞く。

(4) その他

休み時間など、他学年、クラス・担任以外の先生とのパイプ役。

4. 指導補助員として行ったこと

(1) 佑樹さんに対して

低学年：トイレへの介助、授業時間と休み時間などの時間の区別を教える、友人とのパイプ役。

高学年：危険なとき(ナイフなど扱うとき)の配慮。

(2) ご家庭(ご両親)に対して

佑樹さんの学校での様子を報告。

(3) 学校に対して

① 担任に対して

指示されたことについての実行。

② 校長・教頭先生に対して

指示されたことについての実行。

③ その他の方々に対して

音楽の先生や、わかくさ、クラブなどでかかわって先生方に、祐樹さんの考えの代弁？

5. 補助指導員をされた期間を通じて見られた出来事、成長や変化について

- (1) 佑樹さんご自身(クラスでの様子、ほかの子供たちとの関係、担任との関係、意思の表現法、教科学習への取り組みやそのときの様子ほか)

1年生時、好きなときに好きなことをやっていたのが、少しずつ時間の区別がつくようになる。ほかの子供たちとの接し方が、少しずつ、自分からもアピールするようになる。学習では漢字、絵など、好きなことは集中してやるが、嫌いな物には、いらいらしてしまう。

(2) 周りの子供たち

はじめは、佑樹さんが大きな声を出したり、暴れていたのにびっくりするが、だんだん、なぜそうするかがわかり、そうなったときに助けてくれる子も出てくる。佑樹さんが、漢字や絵が得意なことに関心を示し、そこから話が広がる。

(3) 担任の先生

1,2年時の担任、給食のおかわりの時間などにつきっきりで、指導したり、佑樹さんと、体でぶつかって分かり合おうとしていた。3年時の担任、おおらかな方で、はじめから佑樹さんは信頼していたようだ。細かいことは言わず、いつも見守ってくださっていた。

(4) その他の人々

他学年の児童などは、初めは奇異な目で見ていたが、わかさやクラブ活動では、いろいろと気にかけてくれ、それに佑樹さんも答えていた。

6. 指導補助員として学校にかかわっていて感じたこと

(1) 学校全体について

① 一般的に

保守的。トラブルに敏感。決め付けた考え方。

② 障害のある子供の教育に関することについて

養護級があるのだからという考え方がある。

(2) 学級について

① 一般的に

自分のクラスがよければという考え方がある。

② 佑樹さんを含めたクラスの様子・変化について

佑樹さんがいることによって、弱いものへの優しさ、接し方がわかっていったのではないかと思う。自分が自分から他人への思いやりが芽生えていった。

③ 担任の先生の様子、変化について

大変だという考え方から、思ったより大丈夫というような変化が見える先生も…

7. 障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けることについてのお考え

度合いにもよるでしょうが、佑樹さんの場合は、クラスの子供たちと接することで社会性や時間が身に付いたと思う。また、ほかの子供たちにも、優しさなどが生まれ、とてもいいことだと思う。

8. 今後、障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けるためにはどのような条件整備が必要だと思いますか、また、どのようなことが大切だと思いますか。

担任の先生の考え方、知識、先生の選択、クラスの人数、補助指導員の配置、担任の先生やほかの保護者の方の理解。

9. 上記以外に、指導補助員をなさって現在感じられていることなどを自由にお聞かせください。

つかず離れずがベストだと思っていましたが、ほかのクラスの子供たちに手がかからなくなったころから、少し手を出しすぎのところがあった。まずは本人の意思や自主性を考えるのが一番と思った。

【花岡 美紀さん (H.11.11.1~H.14.3.19 週2~3回)】

1. 指導補助員をされるにあたって考えたこと

(1) 補助指導員とはどのような役割であると思いましたが

障害のある子供が学校という集団生活の場で、生活して

いくために補佐する。

(2) どんな配慮が必要だと思いましたが

怪我などの事故がないよう気をつける。

2. 指導補助員をされるにあたって打ち合わせをした相手と内容

前任者の本前原さんと、佑樹さんの性格や、声かけをするべきことなど。

3. 指導補助員として配慮・工夫した点

(1) 佑樹さんに

なるべく自分でできることは、手を出さずにやりたい様にさせました。

(2) ほかに子どもたちに

佑樹さんに対して親しみをもってもらえるよう、声かけをしたりしました。

(3) 担任に

佑樹さんのために、授業の進行が妨げられないように、佑樹さんがついていけないときは補佐しました。

(4) その他

—

4. 指導補助員として行ったこと

(1) 佑樹さんに対して

生活面に対しての補佐(トイレへの声かけや、次に行くことへの声かけ)

勉強面に対しての補佐(作文や図工、家庭科の製作の手伝い)

(2) ご家庭(ご両親)に対して

学校での佑樹さんの様子の報告。佑樹さんが伝えられない学校からの連絡(宿題や持ち物、etc.)

(3) 学校に対して

① 担任に対して

佑樹君のために、ほかの子供たちへの指導がおろそかにならないようにしました。

② 校長・教頭先生に対して

—

③ その他の方々に対して

—

5. 補助指導員をされた期間を通じて見られた出来事、成長や変化について

(1) 佑樹さんご自身(クラスでの様子、ほかの子供たちとの関係、担任との関係、意思の表現法、教科学習への取り組みやそのときの様子ほか)

面倒見のいい子などが声をかけてくると、一緒に楽しそうにしていたりしたのですが、最近では自分からお友達のそばによって行って、遊んだりするようになりました。

(2) 周りの子どもたち

もともと面倒見のいい子達以外の子供も、声をかけてあ

げたり、佑樹君ができないことは、できることに変えてあげたり、佑樹君ができないことによって、だめになったりすることがあっても、怒らずにいてくれたり、思いやりをもてるようになりました。

(3) 担任の先生

学習面に関して以外は、祐樹くんを特別扱いしなくなったように思います。

(4) その他の人々 —

6. 指導補助員として学校にかかわっていて感じたこと

(1) 学校全体について

① 一般的に

私の子供の学校がマンモス校なので、余計にかんじるのかもしれませんが、人数が少なくのんびり、和気あいあいとした学校だと感じました。

② 障害のある子どもの教育に関することについて

特殊級の子供が、普通級とのかかわりも多く、普通級の子供の障害のある子に対する意識が高いと思います。

(3) 学級について

① 一般的に

人数が少ないせいか、1人1人がちゃんと意見を出せて、みんなが生き生きしている。

② 佑樹さんを含めたクラスの様子・変化について

佑樹さんがいるおかげで、みんなが団結したり、思いやりを持ったりできるようになったと思います。

③ 担任の先生の様子、変化について

個性的な方なので、何事にもマイペースに取り組んでいるように思います。

7. 障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けることについてのお考え

私は佑樹さんが4年生の秋から介助していますが、4年生のときはクラスの中でもすこし特別な存在的なところがありました。5年生、6年生になるにつれて、ほかの子供たちとほとんど変わらなくなり(学習面では無理ですが)「通常学級」で教育を受けてきた成果だと感じています。

8. 今後、障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けるためにはどのような条件整備が必要だと思いますか、また、どのようなことが大切だと思いますか。

私たちのような補助指導員、担任の先生の配慮、同じクラスの子供たちの理解、協力。

9. 上記以外に、指導補助員をなさって現在感じられていることなどを自由にお聞かせください。 —

【馬場 よう子さん (H.11.10~H14.3.19, 週2~4日)】

1. 指導補助員をされるにあたって考えたこと

(1) 補助指導員とはどのような役割であると思いましたが学習面での補助だけでなく、ほかの子供たちや担任など、周りの人たちとのパイプ役であると思います。

(2) どんな配慮が必要だと思いましたが

偏見をしないこと、また、すべてにおいて手助けをするというのではなく、彼が自分でやろうとしているときには、少し距離をおいて見守ってみる、というような配慮が必要だと思いました。

2. 指導補助員をされるにあたって打ち合わせをした相手と内容

本前原さん、ご両親、教頭先生、校長先生、担任、授業中の指導の仕方、休み時間の過ごし方について、ほかの子供たちとのかかわりについてなど。

3. 指導補助員として配慮・工夫した点

(1) 佑樹さんに

できるだけ友達とかわかっていけるようにした。(休み時間、ほかの子供と遊べるように、など)また、できるだけ授業についていけるように指導しました。

(2) ほかの子供たちに

休み時間など、佑樹さんが交わるように声をかけたりしました。

(3) 担任に

お母さまの意向を伝えたり、おうちの方からの連絡事を伝えたりしたことが主です。佑樹さんについて、気づいたことなどをその場で伝えるようにしました。

(4) その他 —

4. 指導補助員として行ったこと

(1) 佑樹さんに対して

学習の補助、校外学習時の付き添い、休み時間一緒にすごす、など。

(2) ご家庭(ご両親)に対して

ノートに、その日あったこと、その日の佑樹さんの様子、気付いた事などを書いて、お知らせする。

(3) 学校に対して

① 担任に対して

佑樹さんのそばにいて、感じたことなどを伝えた。

② 校長・教頭先生に対して

上に同じ

③ その他の方々に対して —

5. 補助指導員をされた期間を通じて見られた出来事、成長や変化について

(1) 佑樹さんご自身(クラスでの様子、ほかの子供たちとの関係、担任との関係、意思の表現法、教科学習への取り組みやそのときの様子ほか)

4年生のときは、クラスで一人でいることが多かったが、6年生になってからは、誰かと一緒に楽しそうにしている姿もよく見られるようになった。学年が進むにつれて、授業中、落ち着きが出てきた。4年生のときは、思い通りにならないと、大声を出したり、暴れたりすることも度々あった。

(2) 周りの子供たち

周りの子供たちは、佑樹さんのことを、弟のような存在としてみていたと思う。偏見は持っていなかったが、彼に対して、特別な心遣いをしてくれる子が多かった。

(3) 担任の先生

教科学習の面では、佑樹さんには、特別な対応をされていた。(テストのとき、みんなより時間を長くしてくれるなど)

(4) その他の人々 -

6. 指導補助員として学校にかかわっていて感じたこと

(1) 学校全体について

① 一般的に -

② 障害のある子供の教育に関することについて -

(2) 学級について

① 一般的に -

② 佑樹さんを含めたクラスの様子・変化について

クラスの子供たちは、佑樹さんの存在を認め、彼が困っているときには、そばにいる子が自然に手助けをしている。

③ 担任の先生の様子、変化について

佑樹さんが大声を出したりしたときには、やさしく注意し、いいときにはほめている。学習面でも、生活面でも、気遣っておられる。

7. 障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けることについてのお考え

障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けるのは、その子の障害の度合いによると思います。重度の子は無理があるように思いますが、障害のない子供たちとかかわっていく必要はあると思います。両者をまったく切り離してしまうのはよくないと思います。

8. 今後、障害のあるお子さんが「通常学級」で教育を受けるためにはどのような条件整備が必要だと思いますか、また、どのようなことが大切だと思いますか。

本人やご家庭の方がどういうことを希望しておられるかにもよると思いますが、担任以外に、その子の補助をする人が必要だと思います。また、偏見を持たないような教育が必要だと思います。

9. 上記以外に、指導補助員をなさって現在感じられていることなどを自由にお聞かせください。 -

私達が学校にいる時間が3時間だけなので、いないときに担任が子供たちに口頭で連絡したことは、佑樹さんやご家庭に伝わっていないことが多かったので、必ず黒板に書いておくなどの方法をとってもらえないか、とよく思いました。また、私たちが帰った後に、佑樹さんが怪我をしたこともあり、3時間だけでは、100%フォローしきれないということを実感しました。が、学年が進むにつれ、彼はどんどん成長してきたので、最近では直接手助けをすることは少なくなりました。強いていえば、教科学習の面では私達を頼っている、と感じることがあります。

(VII) 指導補助員をされた方々へのインタビュー

2002年2月7日実施

1. 本前原さん

【経過を振り返って】

子ども同士の関係でいうと、1年生の頃はドーンと身体で相手にぶつかっていていた。本人は子ども同士でじゃれたいし、学校への行き帰りに、ランドセルを前にして大きな子たちにつぶかっていた。2年生頃になると徐々に大きい子たちもわかってきて、ぶつかり合って楽しめるようになった。そういうのを嫌っている子にやって嫌だと言われたこともある。

鬼ごっこに入りたいのだけれど、声を掛けてもらっても本人が逃げてしまい、周りの子どもどうしたらいいかわからないということがよくあった。いるだけでいいんだからと言うと、皆の周りを回っていた。

1年生の頃の様子としては、他動で椅子に乗ったりじっとしていなかった。高田先生に肩車してもらっていることも多かった。1年生の後半まで授業中に外や廊下に出てしまう、椅子や掃除道具の入った箱を叩くという様子が頻繁にあった。2学期の後半まで、高田先生は佑樹君を自由にさせていたように思う。

クラスの子どもたちには、「皆の先生」と紹介された。1年の時は遠くから見ているという距離を取った状態であった。7月に高田先生から「佑樹君の勉強は写し絵です」と言われた」トレーシングペーパーで地図を写すものだった。

9月には図鑑での写し絵になった。そうではないのではないかと思ったが、先生とのコミュニケーションをどう訪たら良いのか非常に難しく、先生の側からも話そうと言う姿勢が感じ取れなかった。「僕は佑樹君だけの担任ではありません」と言われるとそれで終わるしかなかった。

子どもたちは、わからないことがあると私に聞きに来る子もいた。子どもたちは佑樹君が絵や漢字が得意ということを知っていて、皆野話題にもなっていた。

3年生になり、彼は随分落ち着いていた。勉強がうまくいかず教室を脱そうする子がいたり、クラスの子どもの人数も多かった。教室が狭く、子どもたちもいらいらしていた。「佑樹のほうが勉強ができる。僕のほうができないから僕についてくれ」と子どもに直訴されることもあった。佑樹君がライバル視する子が現れいろんな場面でぶつかった。じゃれあいのような感じだった。佑樹君のほうからちょっかいを出すこともあった。1年生の頃、かかわりたくても何もできないでいた頃に比べると格段の違いがあった。北林先生は「けがをしなければ」と止めに入らず、全体に子どもたちの自主性を重んじていた。私ははらはらして見ていた。しかし、この関係が彼の大きな成長につながったと思う。

4年生になり、私がいけない時間に彼をいじめる子が出てきた。自分では直接に手を出さず、他の子にやらせるという状態だった。見ていた子がそれを教えてくれた。4年生の時は、佑樹君と何か遊んでいると皆がやってきて一緒に遊ぶことが多く、私自身とても楽しかった。彼を通じて周りの子どもたちの話を聞く、皆が頼ってくれる、そんな感じだった。女の子は、身体のことの相談などもしてきてくれた。4年生の2学期に出産のために介助員をやめる時、一人の子が「赤ちゃん、保育園に預けて絶対来てね」と言うてくれた。

【学校や行政に求める改善点】

- (1) いろいろなことに、もっと柔軟であってほしい。1年生時は学校も試行錯誤であったのかもしれないが、工夫すれば遠足なども付き添いができたように思う。また、介助の時間帯も、話し合って本当に必要な時間を融通することもできたと思う。工夫する必要がある時に必要な話し合いのなされることが不可欠である。
- (2) 担任の出張時にはそれをカバーする学校全体の体制が必要。
- (3) 介助員への対応：①下駄箱、ロッカー室、荷物を置く場所の整備。②職員室に入りにくい(中途半端は位置づけで肩身が狭い)。「いてくれればいいですよ」といった感じで、何も言ってくれなかった。「こうしてほしい」とか考えを聞きかかったし、掲示物を貼るような時も使ってもらえたら良かった。「何でもやる」という気持ちで学校に行っていた。③保護者とも話しをさせてほしいかった。

④川崎市内に介助員は何人ぐらいいるのか。その人たちの勉強会、情報交換会があったらよかった。⑤報酬はもっと少なくても良いから全体の人数をもっと増やすことが大切だと思う。

- (4) 学級に介助員のいる意味：他の人が入ることはとてもいいと思う。①集会や見学など皆が集まる場面で、低学年で動き回る子がいると担任一人で大変だなと思う。40人に一人ではとても対応できないと思う。②担任に言えないことが言える相手。担任の先生に合わない子もいる。主張できない子もいる。もう一人いることによってちょっと手伝ってもらえることができる。話すことができる。

2. 花岡さん、馬場さん

【経過を振り返って】

一度、本前原さんの介助を見学し、武内さんと本前原さんとの間で交わされてきたノートを読んで引き継いだ。何をしたらいいかわからず、「これとこれをしてください」と言われたらよかった。こんなことで手を出して良いものか、やったほうがよいかと随分迷うことがあった。クラスの子どもたちは違和感なく受け入れてくれたように思う。新しい人なので興味もあったようだ。

子どもたちへは、「皆の先生」と説明された。「心の病気」と佑樹君に対する説明があった。その後学校中を子どもたちに連れられて案内をしてもらった。

4～6年生は周りの子どもの成長が急激だと感じた。佑樹君に対する接し方を見ている。6年生ってからは何の心配も要らないと感じている。例えば、バレーボールのサーブの時など、入らないのであればラインの前からやること、入るまで繰り返しやるのを認めるなど、子どもたちが自主的に自分達で考えてやっている。それでサーブが入ると皆で拍手して大喜びするといった様子が生活の中にごく自然に見られる。最初は面倒見がいい子だけがやるといった感じだが、そうじゃなくなってくる。

【担任の先生の見方について】

先生によって考え方が違う。例えば、北林先生は「皆と一緒に」、テストの時間を長くするというようなことはしない。これに対して金津先生は「武ちゃんはちょっと違うよね」と皆にも言う。彼自身はこういったことをどのように感じているだろうか。

【教科学習について】

5年生の時にできていた割り算や分数について随分忘れていたことに気づいた。折々に復習していく必要があるかもしれない。九九は、一時できなくなったりまた思い出したりということがあった。漢字は忘れていない。

【中学での生活について】3人からそれぞれに

- ホームルームが決まっていて、そこから障害児学級に

出かけていく形がいいのではな いか。学校や子どもたち
に早く溶け込むためにも。

- いろんな子どもたちと接することが大切。
- 今までと同じように、普通にいろんな友達と一緒にいる
時間があつたほうがいい。

(Ⅷ) 武内さん；保護者（ご夫婦）へのインタビュー

2002年2月19日実施

3歳頃、わずかな個数のレゴブロックを使って、大人にもそれとわかるペンギンなど数種類の動物を作った。また、路線バスで幼稚園に通い始めて数ヵ月後、バス内で流されるバス停のテープを口真似しながら漢字のバス停名を書いているのを見て、言葉のやりとりは出来なくてもパターン認識によるコミュニケーションが出来るようになるのではないかと、心に希望が湧いた。

【就学先について】

当初、公立小学校の特殊教育には、懐疑的であった。私立小学校に入れなかつたと調べ、実際に受験もしたが、入学の選考に選ばれなかつた。

普通級在籍を希望することは、幼稚園2年間の体験から決めた。手応えを感じたのは、最後の半年。幼稚園では母親同士のボランティアによる介助員がついていた。年長の時の運動会では自分一人で一周走った。お遊戯も列からはみ出ることがなかつた。卒園直前の運動会では、探さないと本人が分からないぐらい集団行動ができていた。卒園前に先生からもことばの指示だけで行動できたという話を聞いた。

しかし、最後まで迷った。当時住んでいた地域の特殊学級の先生が幼稚園に見に来てくれて、通常で大丈夫と言われた。幼稚園の主任の先生も、低学年では理屈抜きで受け入れてくれるだろうから、そんなに恐れる必要はないと言われた。父親の知り合いであった西梶ヶ谷小学校の栗田先生が「できるところまでやってみましょう」と言ってくださり、その一言で決めた。

市教育センターには、普通級在籍を希望するという方針を伝えたのみであった。

就学後は「いじめられるのではないか」という不安があつた。また、幼稚園ほどは担任の先生が話を聞いてくれることはないのではないかとも思った。

【入学後】

<介助員>入学後すぐに「新しい制度で介助員がつけられるのだが、それを希望されますか」と校長先生から話があつた。すぐにお願ひすることにしたが、7月まで人が決まらなかつた。幼稚園の主任の先生に相談し、人が見つかった。
<個別対応>1年生の1学期、「障害児学級のお子さんが一人転校することになり、残る一人のお子さんが交流クラ

スに行っている間に個別指導の時間を設けることについていかがですか」と校長先生から話があつた。お願ひすることにし、6月3日から開始された。

【学校での様子】

(1) 1年時：運動会の時、音楽専科の先生を一人つけてくれた。競技をしている時間よりも見ている時間が長いため心配したが、思ったよりよくできて、困った行動もなくほつとした。2年ぐらいまでは多動で教室から頻りに飛び出していた。3年の時も体育の時間に、列を離れて遊具倉庫に飛び込んでいた。

(2) 介助員のかかわり方：体育の授業参観で、とても良いやり方をしている様子を見て、この人なら全面的に信頼できると思つた。

(障害物競走の練習にて)

一回目：最初から最後まで手を引いて誘導する

二回目：横について声だけで誘導する

三回目：スタート時の声掛けだけで

(3) 困つたこと：全校朝礼の時に大きな声が出てしまう。この時間は介助員の方がいない時間で、その様子を姉から聞いた。彼が声を出すと皆が姉を見る。姉の将来をどうするかについてのことが大きな不安だつた。介助員のいない時間が不安だつた。

(4) 彼に対する取り組みということで、担任からのコンタクトはなかつた。

(5) 1年生から2年生になる時、担任から12月の段階で障害児学級を勧められた。夫婦とも通常級でいく考えであり、一貫してそれを伝えた。

(6) 2年時、3年生になって介助員がつくかどうか不確定だつたので、介助員がつかない場合本人の様子はどうなるか試みたいと提案したが、今は2年生であり3年生になってからのこととは違うのでやっても意味はないと言われ納得ができなかつた。

【今後について】

中学校障害児学級の体験入学の時に、緊張していたのか、退屈だつたのか、計算問題をやっていて盛んに欠伸をしていた。今後、佑樹が将来に対してどれだけの選択肢がもてるかが重要なポイントになってくるだろう。親としては、どれだけなりたいものの枠を広げてやれるかだと思ふ。それを広げることにつながるのであれば、中学で多少のいじめにあつてもいい。実社会に出た時のいじめみたいなことは、中学にはない。やがて実社会に出た時、本人が今までが守られた世界にいたということに気づくことと思ふ。

今でもまだどこかで、切れていたスイッチが入つて普通の子になるのではないかという思ひがある。

【保護者からみた通常学級での6年間と中学への期待】

－中学特殊学級担任との打ち合わせに向けての準備メモから（3月5日実施）－

1) 無事に貴校の学区内に転居が決まりました。3月18日に引越しをします。

ここまで色々和无理を言ってお手数をお掛けしましたが、改めて宜しくお願いたします。

2) さて、入学後の在籍先はクオレ級（「障害児学級」；筆者注）ということで認識しておりますが、佑樹の転入により、先生の配員枠が増えることを期待してました。そうはならないとのこと、残念に思います。

3) 最近の状況につき、ちょうど先週の土曜に学習発表会というものがありましたので、その時の様子をビデオでお見せしたく持って来ました。

(30秒ほどのシーンをふたつ)

シーン1：縦笛の合奏、合奏前の挨拶がひとりで出来ている様子。指使いのアップ画面。きちんとメロディをたどっている。

シーン2：休憩時間の終わり、他のグループの発表開始前。後ろの子と適度にふざけながら、おとなしく座っている。

4) ビデオを見ても、日常の行動は相当レベルで出来ることと考えます。中学校では、親としては<極力>普通級での生活を増やしたく思います。

学力の到達レベルとしては、極論で言えば、四則演算が出来て、新聞が読めれば生活に困ることは無いかと。

黒柳徹子さんの「窓際のトットちゃん」で良いと考えています。

(IX) 算数スペシャル講習会のお知らせ

算数スペシャル講習会のお知らせ

卒業式の練習をきっちりとし、5年生としての役割をしっかりと果たしている皆さんをとてものもしく思う今日この頃です。

さて、5年生の学習もそろそろまとめの時期となり、各教科で仕上げの段階をむかえていることだと思います。中でも、算数については、やり残しがあったり、よくわからないまま6年生になってしまったりすると、あとで大変困ることになってしまいます。

そこで、5年生では、クラスを関係なくして、算数の総復習の時間を設けたいと思います。以下に書かれてある内容の中から、自分なりにちょっとわかりにくかったり、自信がなかったりする単元を選んで、復習を進めてください。

1日1時間（45分）の実施です。じっくりと復習に取り組んでほしいところですが、時間にゆとりのある人は、1つだけをするのではなく、行きたい順にいくつかを回ってみてもいいです。はじめからいなくても、学習に参加できるようになっています。

3人の担任の先生は、それぞれのクラスで行います。濱口先生は、その時その時で場所が変わるかもしれないので当日連絡します。

また、移動は、自分の机といすをもって移動することになりますので、机の中を軽くするなどの工夫をしてください。お道具箱も使いませんので、教室のロッカー等においておくともよいでしょう。ただし、高田先生のところでは、定規と分度器とコンパスを使いますので、持ってきてください。

いつもと違う先生や、いつもと違う友達といっしょに、いつもと違う雰囲気での学習をすすめてください。がんばり次第でも効果的な復習ができると思います。わからないことは担当の先生にどんどん聞いてください。そのための先生たちなのですから。

さあ、自分なりに計画を立てて、がんばってやりましょう！

先生	13日(火)	14日(水)	16日(金)
高田先生	体積の問題	面積の問題	図形の応用問題
北林先生	単位重あたりの問題	割合・百分率	計算の応用問題
岡田先生	分数の計算	小数の計算	分数・小数の計算
濱口先生	文字を使った式①	文字を使った式②	

キ リ ト リ

マイプランを知らせます。

5年 組 名前

日にち	やること（いくつかを回ろうと思っている場合は、回る順番を書く）
13日(火)	
14日(水)	
16日(金)	

後日、変更することはできますが、必ず担任の先生に知らせるようにしてください。

図6. クラス枠を外した算数の取組み

(以 上)

謝 辞：この6年間、保護者の武内さん、西梶ヶ谷小学校の歴代の校長先生はじめ佑樹さんの担任をされた先生方、お会いした先生方そして介助員の方々が、それぞれいつも感じたり考えていらっしやることを率直にお話をしてくださり、私はそれをうかがってきたように思います。また、学校を訪問して佑樹さんに会うと「あ、たきさかセンサー」といって迎えてくれていたのが、6年生も後半になると、照れくさいのかすっとは近づいてきてくれなくなりました。彼の成長を感じることしきりです。本稿をつくるにあたって皆さんが最大限の共同作業をしてくださりました。最後になりましたが、心から感謝申し上げますとともに、武内君の中学校生活が彼の自立に向けて豊かで充実したものであることを心から願っています。